

川原川右岸地区遺跡群Ⅰ

川原川右岸地区県営ほ場整備事業に伴う文化財調査報告

前原市文化財調査報告書

第57集

1995

前原市教育委員会



川原川右岸地区遺跡群 I

川原川右岸地区県営ほ場整備事業に伴う文化財調査報告

前原市文化財調査報告書

第57集

序

川原川右岸地区県営ほ場整備事業は農業の発展を阻害している、諸要素の改善のため平成元年度から開始されました。これに伴い前原市教育委員会では発掘調査を実施してきたところであります。

前原市を含む糸島地方は、古代「伊都国」が栄えた土地として知られておりますが、それを裏付ける多くの遺跡が発掘されております。川原川右岸地区県営ほ場整備事業施工区内にも多くの遺跡が存在しており、止むなく保存できなかった遺跡について発掘調査を実施しました。本書は平成3年度に実施した高祖榎町遺跡、高祖大鷲遺跡の調査報告書であります。

本書が文化財保護思想の普及・啓蒙ならびに古代史の解明に少しでもお役に立つならば、これにまさる喜びはございません。

なお、末筆ではありますが文化財の保護にご理解を頂き、発掘調査に御協力頂きました福岡県福岡農林事務所、前原市土地改良区には心より感謝申し上げます。

平成7年3月31日

前原市教育委員会

教育長 樗木 昭生

例 言

1. 本書は川原川右岸地区県営ほ場整備事業に伴い平成3年度に実施した、高祖榎町遺跡及び高祖大鷲遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査および整理作業は国及び県の補助を受けて前原市教育委員会が行った。
3. 本書に掲載した地形測量図および遺構実測図の作成は川村博・角浩行・瓜生秀文（前原市教育委員会）が行った。
4. 本書に掲載した遺物実測図の作成は角、瓜生、是田敦（福岡大学学生）が行った。
5. 本書に掲載した図面の製図は角、瓜生、柴田由美子、中原晴香、吉田恵美子、中田忍、中峰ますみが行った。
6. 本書に掲載した遺構・遺物写真の撮影は川村、角、瓜生が行ったが、甕棺の撮影はフォトハウスおか、遺跡全景写真の撮影は(有)空中写真企画によるものである。
7. 本書で示した方位は磁北である。
8. 本書の執筆はⅠ～Ⅲ・Ⅴを角が、Ⅳを瓜生が行った。
9. 本書の編集は角・瓜生で協議のうえ、角が行った。

本文目次

I. はじめに	1
1. 調査にいたる経過	1
2. 調査の組織	1
II. 位置と環境	4
III. 高祖榎町遺跡	7
1. 調査の概要	7
2. 調査の記録	7
(1) 甕棺墓	7
(2) 土壙墓	15
(3) 土坑	15
(4) 掘立柱建物	16
(5) その他の出土遺物	16
3. 小結	17
IV. 高祖大鷲遺跡	18
1. 調査の概要	18
2. I 区の調査	18
(1) 1 号墳	18
(2) 2 号墳	22
(3) 住居跡	23
(4) 木棺墓	26
(5) 土坑	27
(6) 溝	29
(7) 落ち込み状遺構	29
(8) その他の出土遺物	30
3. II 区の調査	32
(1) 3 号墳	32
(2) 住居跡	36
(3) 土坑	37
(4) 溝	40
(5) その他の出土遺物	40
4. 小結	41
V. おわりに	42

挿 図 目 次

Fig. 1	川原川右岸地区ほ場整備事業施工範囲と埋蔵文化財調査地点(1/20,000)	3
Fig. 2	高祖榎町遺跡・高祖大鷲遺跡の位置と周辺の遺跡(1/50,000)	5
Fig. 3	遺跡周辺の地形(1/2,500)	6
Fig. 4	1号甕棺墓実測図(1/30)	7
Fig. 5	1号甕棺実測図(1/8)	8
Fig. 6	2号甕棺墓実測図(1/30)	9
Fig. 7	2号甕棺実測図(1/8)	9
Fig. 8	3号・4号甕棺墓実測図(1/30)	10
Fig. 9	3号・4号甕棺実測図(1/8)	10
Fig. 10	5号甕棺墓実測図(1/30)・5号甕棺実測図(1/8)	11
Fig. 11	6号甕棺墓実測図(1/30)	11
Fig. 12	6号甕棺実測図(1/8)	12
Fig. 13	7号・8号甕棺墓実測図(1/30)	13
Fig. 14	7号・8号甕棺実測図(1/8)	14
Fig. 15	土壙墓実測図(1/30)	15
Fig. 16	1号土坑実測図(1/30)	15
Fig. 17	2号土坑実測図(1/30)	15
Fig. 18	掘立柱建物実測図(1/60)	16
Fig. 19	出土遺物実測図(1/3)	16
Fig. 20	1号墳地山整形測量図(1/150)	18
Fig. 21	1号墳石室・周溝断面実測図(1/60)	19
Fig. 22	出土遺物実測図(1/3・2/3)	20
Fig. 23	2号墳石室実測図(1/60)	21
Fig. 24	出土遺物実測図(1/3)	21
Fig. 25	1号・2号住居跡実測図(1/60)・出土遺物実測図(1/3)	23
Fig. 26	1号木棺墓実測図(1/30)	24
Fig. 27	出土遺物実測図(1/3)	24
Fig. 28	2号・3号木棺墓実測図(1/30)	25
Fig. 29	1号・2号土坑実測図(1/30)	26
Fig. 30	出土遺物実測図(1/3)	27
Fig. 31	1～4号溝・断面実測図(1/100・1/40)	28
Fig. 32	落ち込み状遺構実測図(1/40)	30
Fig. 33	出土遺物実測図(1/3)	31
Fig. 34	3号墳現況・地山整形測量図(1/200)	32
Fig. 35	3号墳墳丘断面実測図(1/60)	33

Fig.36	3号墳石室実測図(1/60)	34
Fig.37	出土遺物実測図(1/3・1/6)	35
Fig.38	住居跡・出土遺物実測図(1/60・1/3)	37
Fig.39	1～6号土坑実測図(1/30)	39
Fig.40	1～2号溝・断面実測図(1/100・1/40)	39
Fig.41	出土遺物実測図(1/3)	40

図 版 目 次

P L. 1— a	高祖榎町遺跡全景
— b	5～8号甕棺墓(南から)
P L. 2— a	2号甕棺墓(東から)
— b	3号甕棺墓(東から)
— c	4号甕棺墓(東から)
P L. 3— a	6号甕棺墓(西から)
— b	7号甕棺墓(西から)
— c	8号甕棺墓(西から)
P L. 4	甕 棺
P L. 5	甕 棺及び出土遺物
P L. 6— a	高祖大鷲遺跡Ⅰ区全景(上から)
— b	高祖大鷲遺跡Ⅱ区全景(上から)
P L. 7— a	1号墳石室(Ⅰ区、西から)
— b	2号墳石室(Ⅰ区、西から)
P L. 8— a	1号木棺墓(Ⅰ区、北から)
— b	2号木棺墓(Ⅰ区、東から)
— c	1号土坑(Ⅰ区、西から)
— d	1号・2号住居跡(Ⅰ区、南から)
P L. 9— a	3号墳全景(Ⅱ区、上から)
— b	3号墳近景(東から)
P L. 10— a	3号墳石室(南から)
— b	3号墳石室(北から)
— c	3号墳墳丘断面A—A′(北から)
— d	3号墳墳丘断面C—C′(北から)
— e	3号墳墳丘断面B—B′(西から)
— f	住居跡ほか(Ⅱ区、東から)
P L. 11	出土遺物

付図目次

Fig. I 調査区全体図 (1/100、1/300)

表目次

Tab. 1 川原川右岸地区遺跡群の埋蔵文化財調査概要

I. はじめに

1. 調査にいたる経過

川原川右岸地区県営ほ場整備事業はその対象区域が大字大門、高祖、井原、西堂、末永、王丸、川原にわたり、総面積は約164ha に及ぶ広大なものである。事業予定地は西側に古代「伊都国」の中心である三雲・井原遺跡群、東側には国指定史跡「怡土城」を擁し、広範囲に埋蔵文化財が存在する可能性が高い地域であった。

昭和63年9月、前原町土地改良区から当教育委員会に同県営ほ場整備事業の予定地における、埋蔵文化財の有無についての照会がなされた。これに基づき当教育委員会では予備調査を実施し、福岡県福岡農林事務所、前原町土地改良区と埋蔵文化財調査についての協議を行なった。予備調査の結果、事業予定地のうち約13.7haが本調査の対象となるが、事業計画の期間中に調査が可能なのは約4haについてであり、残りについては計画変更で埋蔵文化財に影響を及ぼさないようにしていただきたいと要望した。数度の協議を経て、このことについて基本的な合意が得られたため、事業が開始された平成元年度から調査を開始した。平成元年度から今年度までの埋蔵文化財調査の概要は一覧表(Tab.1) のとおりである。

高祖榎町遺跡、高祖大鷲遺跡は平成3年度に施工された高祖の工区内に存在した。試掘調査によって甕棺墓、土坑、ピット等が検出されたため、客土などにより現状での保存が可能か農林サイドと協議を行なった。しかし、高祖榎町遺跡については排水路に位置しており、高祖大鷲遺跡については用水の関係から、いずれもの設計変更はできないとのことであったので、発掘調査を実施した。なお、遺物整理及び報告書の作成については平成6年度に実施した。

2. 調査の組織

高祖榎町遺跡、高祖大鷲遺跡の発掘調査および整理作業は以下の体制で実施した。

発掘調査（平成3年度）

前原町教育委員会

総括 教育長	樗木 昭生
文化課長	加幡 怡都城
文化課文化財係長	吉村 耕治
庶務 同 文化振興係長	中園 俊二
調査 同 文化財係	川村 博・角 浩行・瓜生 秀文

なお、平成4年4月前原町役場の機構改革により教育部が設置され、その後10月1日には市制施行により前原町が前原市となった。平成6年度の業務は以下の体制で行った。

遺物整理・報告書作成

前原市教育委員会

総括 教育長	樗木 昭生
教育部長	中原 直国
文化課長	井上 尚
文化課文化財係長	川村 博

庶務 同 文化振興係長
整理 同 文化財係

清水 真澄
角 浩行・瓜生 秀文

Tab. 1 川原川右岸地区遺跡群の埋蔵文化財調査概要

調査年度	調査地点	調査の概要
1990 (平成2)	①高祖六ノ坪遺跡	試掘調査により土師器、陶器、磁器が出土した。怡土城土塁の前面にあたるが、堀などの関連遺構は確認されていない。
1991 (平成3)	②末永六の坪遺跡	試掘調査により甕棺4基を確認した。盛り土施工により現状保存。小型の仿製鏡(鏡式不明)片が出土している。
	③高祖榎町遺跡	発掘調査により甕棺墓8基、土坑、ピットなどを検出した。甕棺はいずれも弥生時代前期末～中期初頭のものである。出土遺物は弥生土器の他、軒丸瓦の瓦当が出土しており、怡土城跡との関連が注目される。
	④高祖大鷲遺跡	発掘調査により古墳3基(後期)、木棺墓3基(弥生中期前半)、住居跡、土坑、溝、ピットなどを検出した。
	⑤高祖大鷲遺跡	発掘調査により水田(?)層を検出した。時期は不明である。削平が遺構面に及ばなかったため工事立合を実施した。
	⑥末永初田遺跡	試掘調査により弥生時代中期の遺物包含層、ピット、土坑などを検出した。盛り土施工により現状保存。県道大野城・二丈線以南にもかなり広範囲に弥生時代の遺跡が存在することが確認された。
1992 (平成4)	⑦末永古屋敷遺跡	発掘調査により掘建柱建物、土坑、溝、ピットなどを検出した。出土遺物には陶器、磁器、土師皿などがある。その他、天聖元寶、元祐通寶、紹聖元寶などの宋銭が出土している。
1993 (平成5)	⑧末永高木遺跡	発掘調査により古墳1基(中期初頭)、木棺墓1基(中世)、遺物包含層(古代以降)などを検出した。出土遺物は土師器、須恵器、陶器、磁器などがある。特筆すべき遺物として「□伊刀郡託」と刻んだ土器、「前田?」と墨書した土師器が出土している。

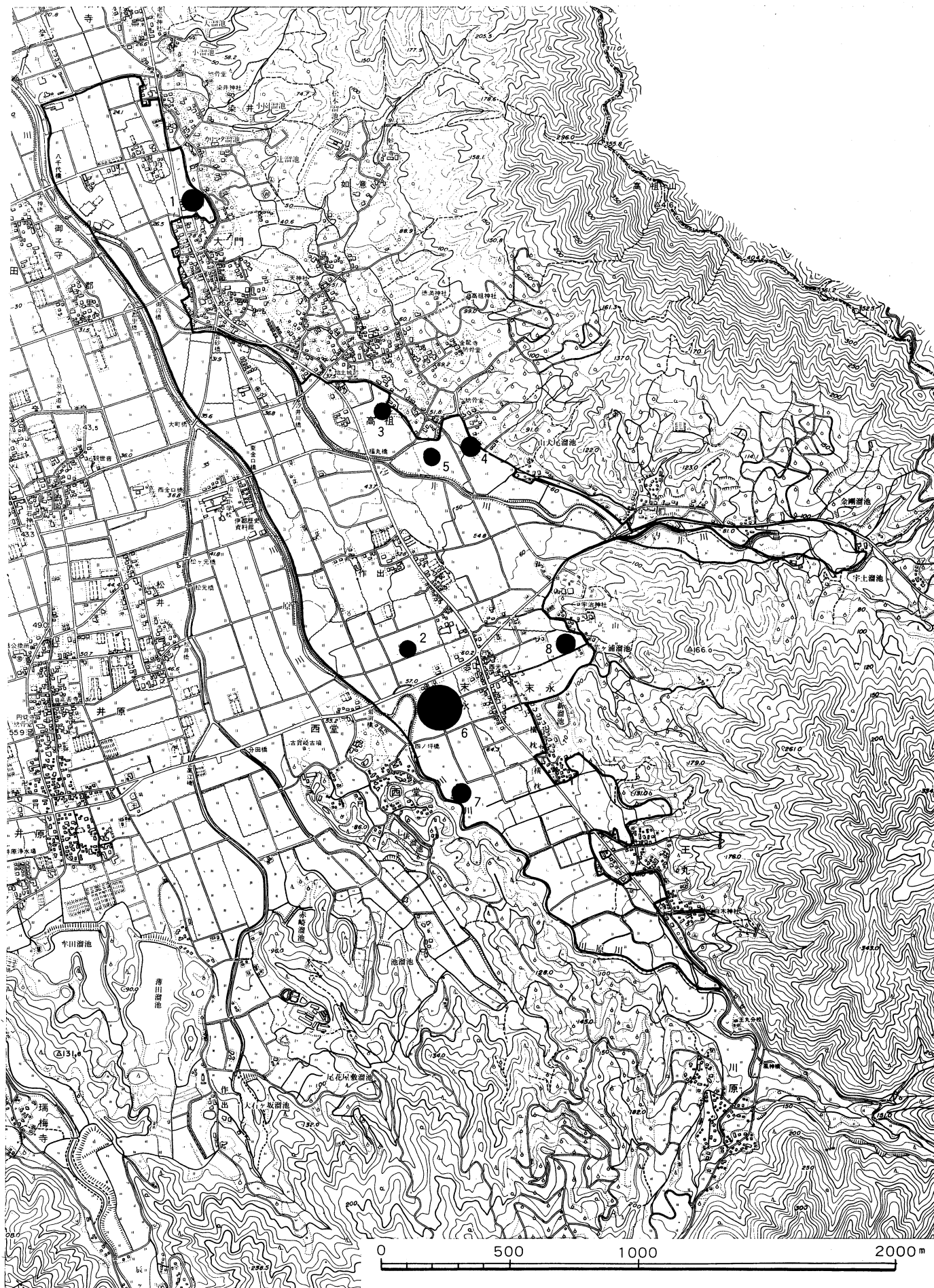


Fig. 1 川原川右岸地区ほ場整備事業施工範囲と埋蔵文化財調査地点 (1/20,000)

Ⅱ．位置と環境

高祖榎町遺跡、高祖大鷲遺跡は前原市の東部、川原川の支流汐井川の右岸に位置する。高祖榎町遺跡は標高約40mを測る河岸段丘上に、高祖大鷲遺跡は標高約60mの丘陵上にそれぞれ立地する。遺跡の位置する前原市の東部は、雷山川、瑞梅寺川の二河川により形成された沖積平野が広がる。井原山（標高983 m）山麓に源を発する瑞梅寺川は中小河川と合流しながら、大字井原、三雲付近では傾斜の緩やかな扇状地を形成し、同井田から下流では沖積地を形成し、今津湾へそそぐ。遺跡の周辺は純農業地帯で、周囲には水田、畑地が広がる。

遺跡の西側には三雲・井原遺跡群が存在する。三雲南小路遺跡1号、2号甕棺からは異体字銘帯鏡を中心とする中国鏡が多数出土しており、弥生時代中期末の王墓とみられる。井原鍬溝遺跡からは方格規矩鏡が多数出土しており、こちらは弥生時代後期初めの王墓とみられる。その他弥生時代を通じて、甕棺墓、石棺墓、住居跡などが広範囲に分布しており、古代伊都国の中心地であると考えられている。

また、曾根丘陵の平原遺跡1号墓も伊都国の王墓とみられる。出土した39面の鏡は方格規矩鏡を主体とする中国鏡群であるが、なかには直径46.5cmを測る仿製の内行花文鏡4面が含まれる。また、近年調査された飯氏遺跡群3次調査Ⅱ区では、後期中頃の甕棺から雲雷文内行花文鏡が出土している。

古墳時代の代表的な遺跡としては、端山古墳、築山古墳があげられる。いずれも前期の前方後円墳である。規模は端山古墳が全長78.5m、後円部径42m、築山古墳が全長約60m、後円部径48mで、いずれも盾形の周溝を持つと考えられている。これらは怡土平野の首長クラスの古墳であると考えられる。これとは別に、下位有力者層の古墳と考えられるものがある。井原1号墳、高祖東谷1号墳などがそれである。いずれも前期の前方後円墳と考えられる。規模は井原1号墳が全長42m、後円部径24m、高祖東谷1号墳が全長36mであり、前二者とは一線を画すものである。

奈良時代になると、高祖山（標高416 m）山麓に怡土城が築造される。「続日本紀」によれば天平勝宝8（756）年から神護景雲2（768）年までの13年間をかけて築造されたと伝えられている。推定で260haの面積を有する広大な城であるが、現在遺構として判明しているのは、約2kmにわたる土塁と望楼跡5カ所、倉庫跡数棟のみである。今後の発掘調査に期待が寄せられる。



- 1.高祖榎町遺跡 2.高祖大鷲遺跡 3.井原1号墳 4.高上石町遺跡 5.雷山神籠石
 6.三雲南小路遺跡 7.築山古墳 8.端山古墳 9.狐塚古墳 10.錢瓶塚古墳
 11.ワレ塚古墳 12.平原遺跡 13.上罐子遺跡 14.波多江遺跡 15.池田東遺跡群
 16.志登支石墓群 17.丸隈山古墳 18.今宿大塚古墳
 A.怡土城跡 B.三雲・井原遺跡群

Fig. 2 高祖榎町遺跡・高祖大鷲遺跡の位置と周辺の遺跡(1/50,000)



Fig. 3 遺跡周辺の地形(1/2,500)

Ⅲ. 高祖榎町遺跡

1. 調査の概要

高祖榎町遺跡は、標高約40mの河岸段丘上に立地し、現況は果樹園ないし畑地であった。調査によって検出された遺構は、甕棺墓8基、土壙墓1基、掘立柱建物1棟、土坑2基、ピット多数であった。遺跡の主体は甕棺墓地であり、時期的には金海式から汲田式にかけてのものである。遺構は大きく削平を受けており、ほとんどは上甕が失われるか、部分的にしか残存していない状況であった。遺跡の南西側は約60cmの段差で低くなっており、甕棺墓地はこの部分にも広がっていたことが十分に考えられる。

調査区は長さ約35m、幅約4～1mであり、調査面積は約90㎡である。

2. 調査の記録

(1) 甕棺墓

1号甕棺 (Fig. 4・5、P.L. 4)

調査区の南東端に位置する接口式の甕棺である。遺構は大きく削平を受けており、上甕の大部分と下甕の約1/3が欠損している。棺の組合せは上棺、下棺ともに大型の甕で、ほぼ同大である。接口部には粘土の目張りを施している。掘形は2段になっており、1段目の掘形の端部から斜めに掘込み、棺を埋置している。下棺の底部は石で固定している。主軸をS-62°-Eにとり、埋置角度は32°を測る。

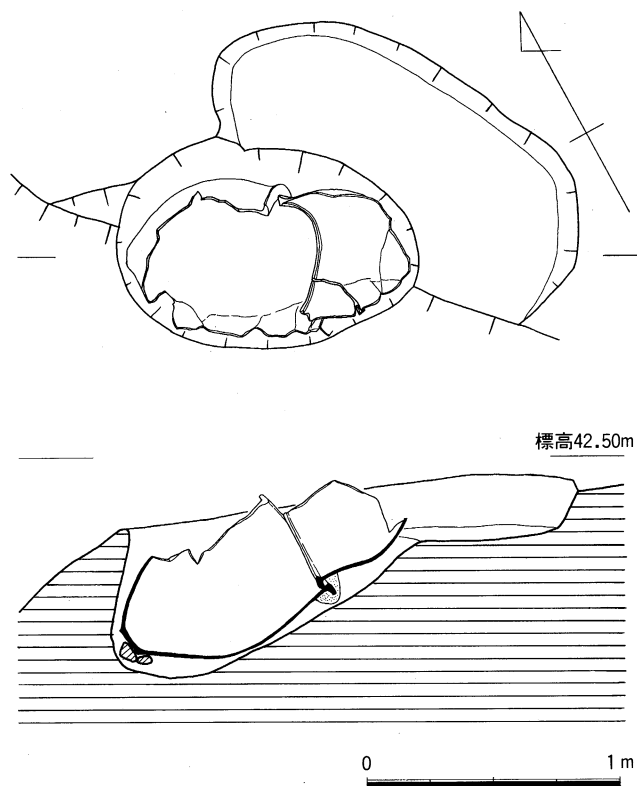


Fig. 4 1号甕棺墓実測図(1/30)

上 甕

大型の甕で、器高72.0cm、口径54.0cm、胴部最大径58.2cmを測る。口縁部は鋤先状を呈し、やや内傾する。端面はヨコナデにより凹面となる。口縁下からやや膨らみながら、胴中位にいたる。胴部最大径は胴中位やや上にある。

調整は内外面ともにナデであるが、底部外面付近にはハケ目が残る。外面には部分的に黒塗りの痕跡が残る。口縁部直下と胴中位やや上に、ヘラ描きの沈線を施す。いずれも一筆描きである。

下 甕

大型の甕で、器高76.0cm、口径57.9cm、胴部最大径62.3cmを測る。口縁部は逆L字状を呈し、ほぼ水平である。端部がやや膨らみ、端面はヨコナデにより若干凹面となる。口縁下からやや膨らみながら、胴中位にいたる。胴部最大径は胴中位に

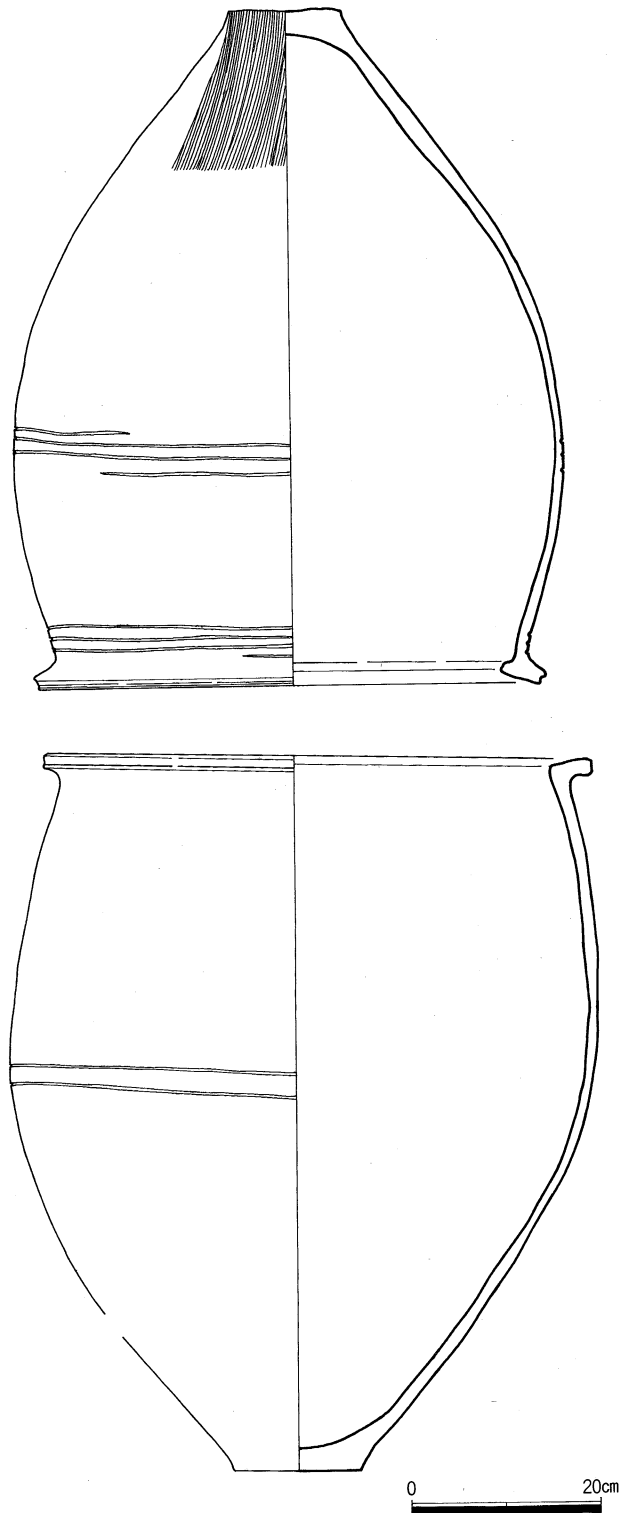


Fig. 5 1号甕棺実測図(1/8)

復元すると70.1cmとなる。胴部最大径は胴上半にある。

調整は外面が板状工具による擦過で、内面はヨコナデである。底部外面付近にはハケ目が残る。

3号甕棺 (Fig. 8・9、P L. 2)

調査区の南東部に位置する。2号甕棺から北西に約2mの距離にある。遺構は大きく削平されて

ある。

調整は外面がヘラ磨きで、内面はナデである。胴中位に、2条のヘラ描き沈線を施す。

2号甕棺

(Fig. 6・7、P L. 2・4)

調査区の南東部に位置する接口式の甕棺である。1号甕棺から北西に約3mの距離にある。遺構は南西側を水田の造成により大きく削平されており、上甕の大部分が欠損しているが、下甕はほぼ完形に近い状態で残存している。棺の組合せは上棺が大型の甕、下棺は大型の壺である。下棺は頸部を打ち欠いている。掘形は2段になっているが1段目の掘形は大きく削られており、ほとんど残存していない。主軸をS-50°-Wにとり、埋置角度は26°を測る。

上 甕

大型の甕で、器高70.8cm、口径47.7cm、胴部最大径53.6cmを測る。口縁部は外に張り出し、端部は丸くおさめる。口縁外面にヘラによる刻目を施す。口縁内面はヨコナデにより凹面となる。器形は下ぶくれ状で、胴部最大径は胴下半にある。

調整は内外面ともにナデであるが、底部外面付近には板状工具による擦過痕がみられる。胴中位やや上に、断面三角形の突帯を1条巡らす。

下 甕

大型の壺で、口縁部を打ち欠いている。残高63.8cmを測り、胴部最大径は

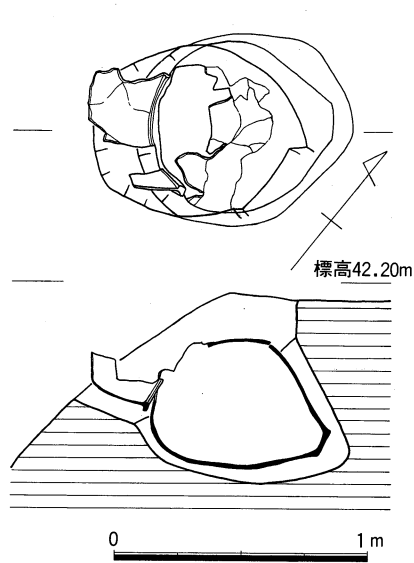


Fig. 6 2号甕棺墓実測図 (1/30)

おり、下甕の上半部が失われている。上甕は検出されていない。棺は大型の甕である。掘形は2段になっており、1段目の掘形の端部から斜めに掘込み、棺を埋置している。主軸をS-11°-Eにとり、埋置角度は50°を測る。

甕棺

大型の甕であるが風化が激しく、完形には復元し得なかった。器高87.2cm、口径76.0cm、胴部最大径70.4cmに復元される。口縁部は内外に張り出し、端部外面は凹面となる。口縁外面にヘラによる刻目を施す。口縁部直下で大きく外反し、口縁部は外傾する。胴部はやや膨らみぎみで、胴部最大径は胴中位にある。

調整は内外面ともにナデであるが、底部外面付近には部分的にハケ目が残る。口縁部直下と胴中位やや上に、3条のヘラ描きの沈線を施す。

4号甕棺 (Fig. 8・9、P.L. 2)

調査区の中央やや北西側に位置する。遺構は大きく削平されており、下甕も上半部が失われている。上甕は検出されていない。棺は大型の甕である。掘形は2段掘りと考えられるが、1段目は削平により不明である。主軸をN-12°-Eにとり、埋置角度は45°を測る。

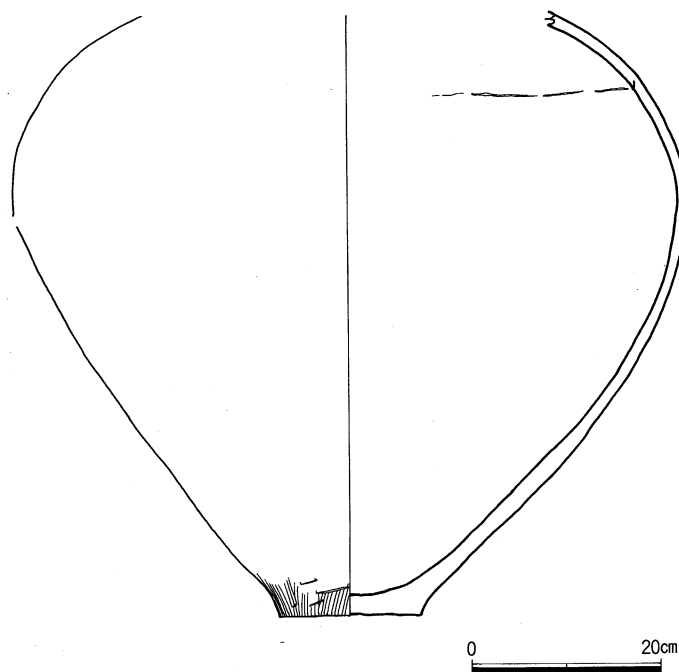
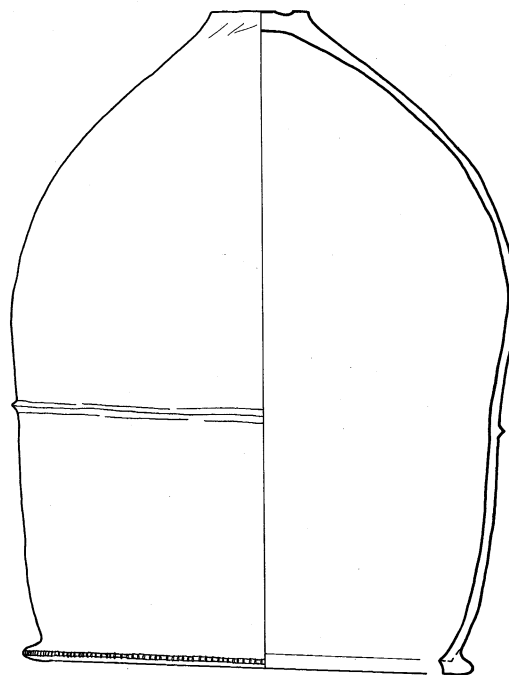


Fig. 7 2号甕棺実測図 (1/8)

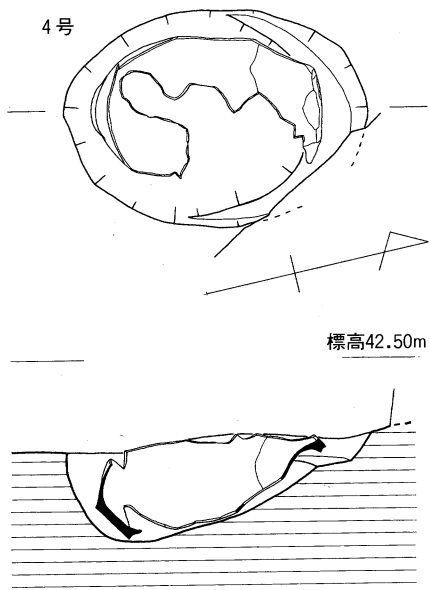
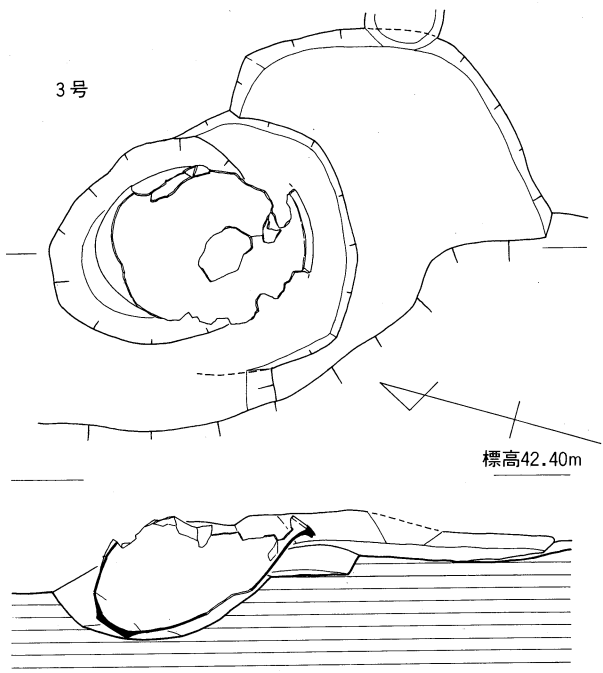


Fig. 8 3号・4号甕棺墓実測図(1/30)

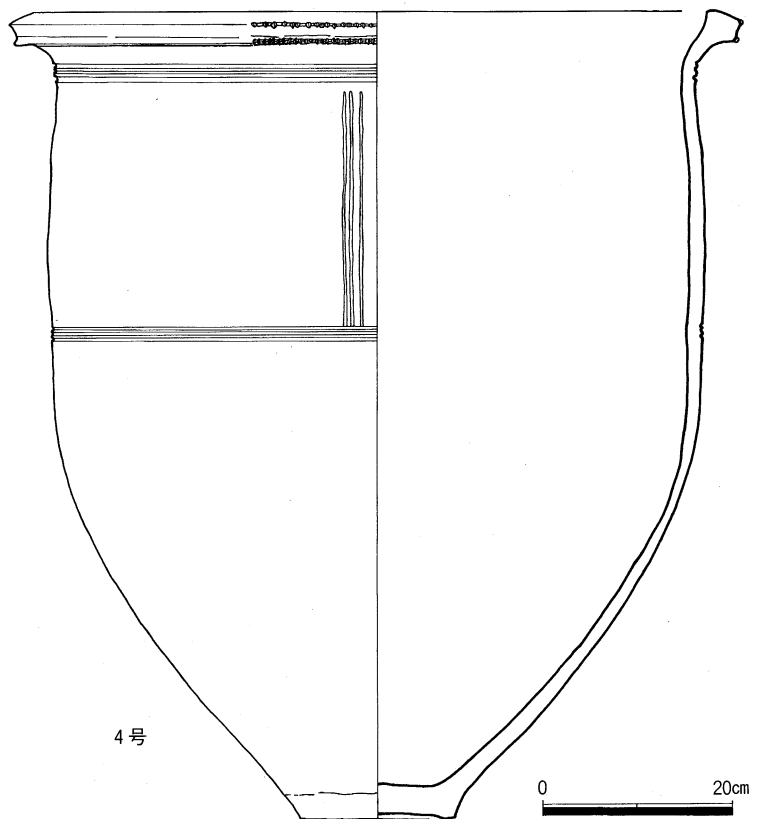
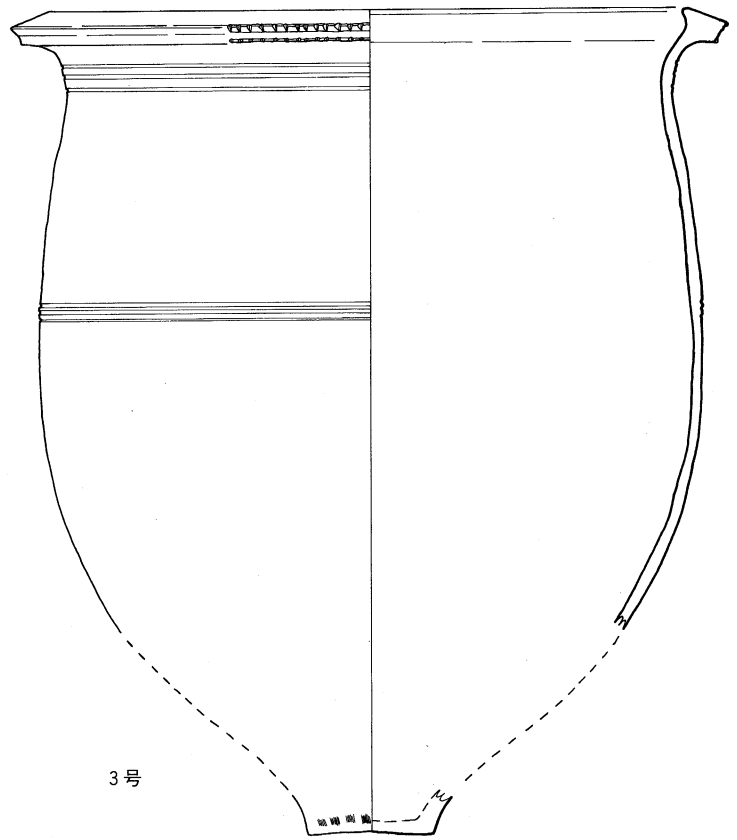


Fig. 9 3号・4号甕棺実測図(1/8)

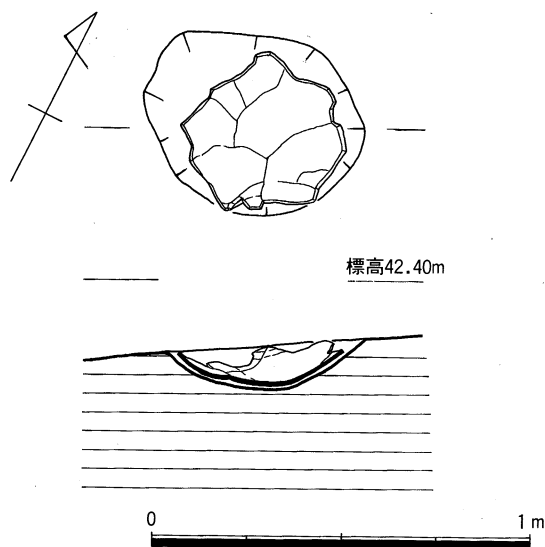


Fig.10 5号甕棺墓実測図(1/30)・

5号甕棺実測図(1/8)

調整は外面が板状工具による擦過で、内面はヨコナデである。口縁部直下と胴中位やや上に、3条のヘラ描きの沈線を巡らし、その間をつなぐように縦方向の同様の沈線を施す。

5号甕棺

(Fig. 10)

調査区の北西部に位置する。6号甕棺から南に約1mの距離にある。遺構は大きく削平されており、下甕の一部しか残存していない。棺は壺であると考えられる。掘形の形状は不明である。主軸、埋置角度ともに不明である。

甕棺

壺形土器で肩から胴下部までが残存していた。復元すると胴部最大径が56cmとなる。器形は肩がやや張る球形で、胴部最大径は肩部すぐ下にある。

調整は内外面ともにナデである。

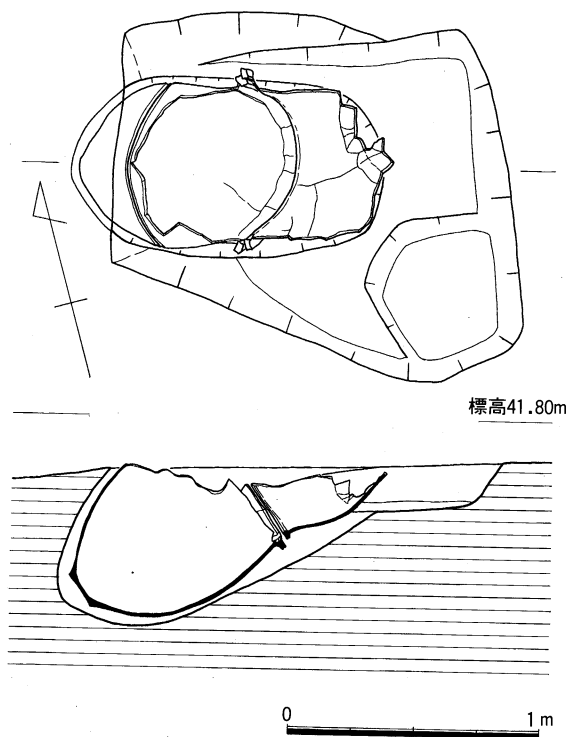


Fig.11 6号甕棺墓実測図(1/30)

甕棺

大型の甕であるが風化が激しく、完形には復元し得なかった。器高85.5cm、口径77.8cm、胴部最大径69.6cmに復元される。口縁部は外に張り出し、端部外面は凹面となる。口縁外面にヘラによる刻目を施す。口縁部直下で大きく外反し、口縁部は外傾する。胴部はほとんど膨らまず、胴部最大径は胴中位にある。

底部はわずかに上げ底となる。

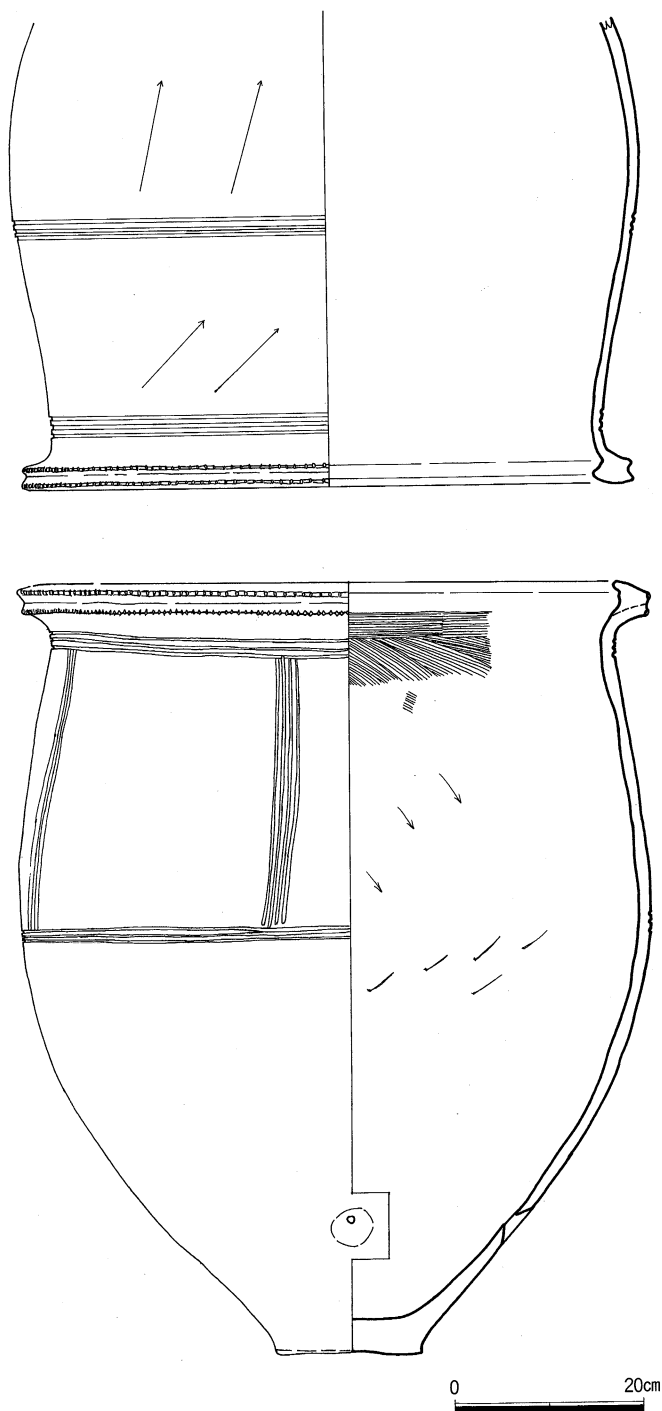


Fig.12 6号甕棺実測図(1/8)

外反し、口縁部上面は外傾する。口縁下からやや膨らみながら、胴中位にいたる。胴部最大径は胴中位にある。

調整は外面はナデである。内面は上半部が板状工具による擦過で、下半部はナデである。口縁部直下と胴中位に3条のヘラ描きの沈線を巡らし、その間をつなぐように縦方向の4条のヘラ描きの沈線を施す。また、底部付近に穿孔がみられる。

6号甕棺

(Fig. 11、12、P L. 3・4)

調査区の北西部に位置する接口式の甕棺である。7号甕棺の南側に隣接する。遺構は削平されており、上甕の大部分が欠損し、下甕も口縁部が半分ほど欠損している。棺の組合せは上棺、下棺ともに大型の甕である。掘形は2段になっており、1段目の掘形は歪んだ台形を呈し、長さ160 cm、最大幅140 cmを測る。1段目の掘形の中央から斜めに掘込み、棺を埋置している。主軸をS-74°-Eにとり、埋置角度は35°を測る。

上甕

大型の甕で、残高49.3cm、口径65.2cm、胴部最大径66.8cmを測る。口縁部は内外に張り出し、端部外面は凹面となる。口縁外面にヘラによる刻目を施す。口縁部直下で大きく外反し、口縁部上面はほぼ水平である。胴部はやや下膨れみで、胴部最大径は胴中位にある。

調整は外面が板状工具による擦過で、内面はナデである。口縁部直下と胴中位やや上に、3条のヘラ描きの沈線を施す。

下甕

大型の甕で、器高82.1cm、口径67.1cm、胴部最大径67.1cmを測る。口縁部は内外に張り出し、端部外面は凹面となる。口縁外面にヘラによる刻目を施す。口縁部直下で大きく

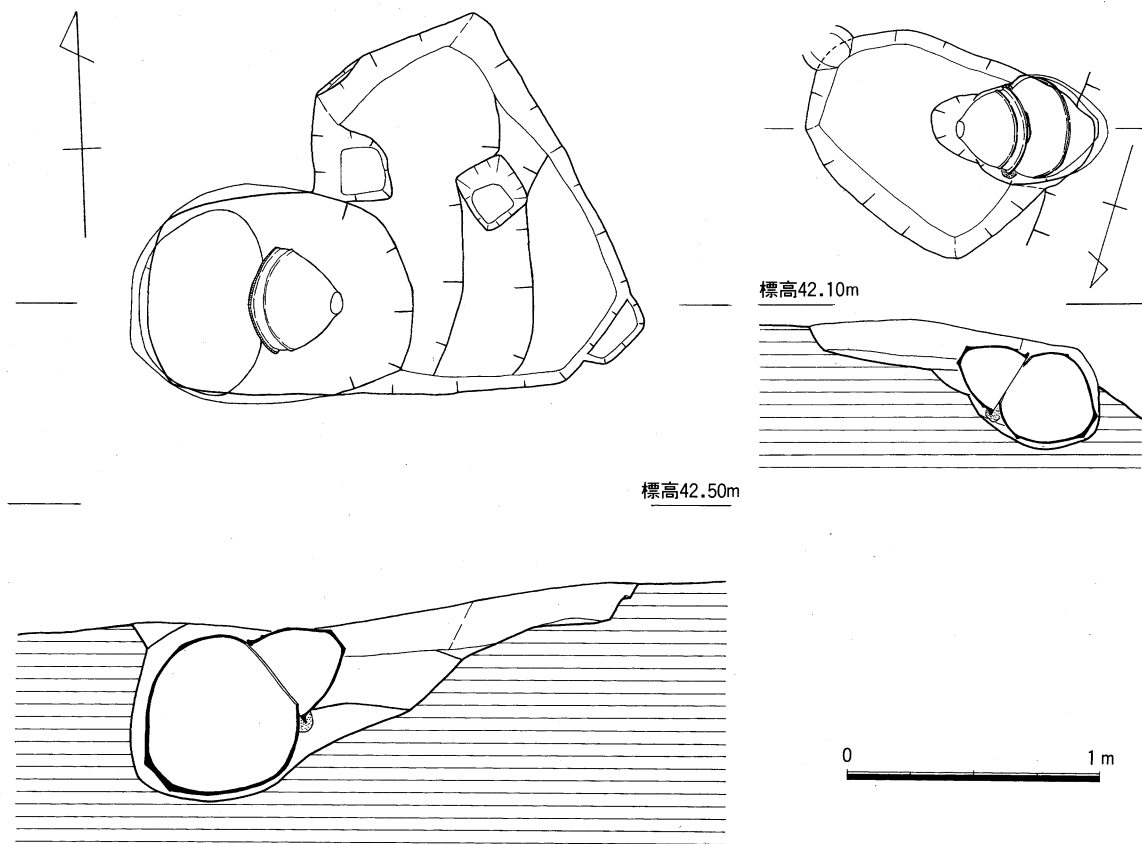


Fig.13 7号・8号甕棺墓実測図(1/30)

7号甕棺

(Fig. 13, 14, P L. 3・5)

調査区の北西部に位置する接口式の甕棺である。6号甕棺の北側に隣接する。遺構は削平されているが、甕棺は破壊をまぬがれ完全に残っていた。棺の組合せは上棺が鉢、下棺は大型の壺である。下棺は頸部を打ち欠いている。接口部には粘土の目張りを施している。掘形は2段になっており、1段目の掘形は不整な長方形を呈し、長さ150 cm、最大幅100 cmを測る。1段目の掘形は階段状を呈し、南西端から斜めに掘込み、棺を埋置している。主軸をS-87°-Eにとり、埋置角度は40°を測る。

上 甕

鉢形の土器で、器高33.2cm、口径44.1cmを測る。口縁部は外側に張り出し、内面はわずかにつまみ出している。口縁端部にヘラによる刻目を施し、口縁部上面はほぼ水平である。底部はわずかに上底となる。胴部には断面三角形の突帯を1条巡らす。

調整は外面の突帯より上はヨコナデ、それ以下はミガキである。内面はナデで、底部に指頭圧痕がみられる。

下 甕

大型の壺で、口縁部を打ち欠いている。残高64.0cm、胴部最大径70.0cmを測る。器形は肩がわずかに張るが、ほぼ球形である。胴部最大径は胴中位やや上にある。底部はわずかに上底となる。調整は外面がミガキで、内面は板状工具による擦過である。内面底部に指頭圧痕がみられる。外面には網籠状の文様がみられる。籠の痕跡であろうか。

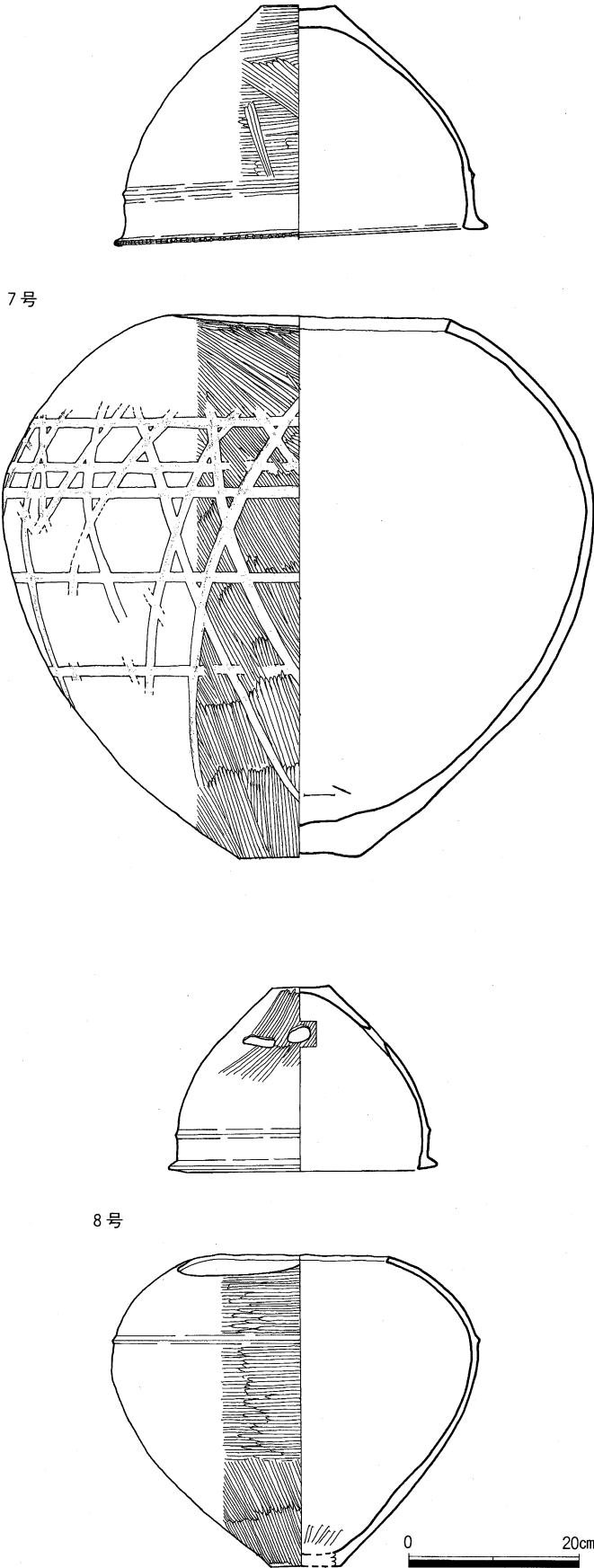


Fig.14 7号・8号甕棺実測図(1/8)

8号甕棺

(Fig. 13, 14, P L. 3・5)

調査区の北西部に位置する接口式の甕棺である。7号甕棺の西側に隣接する。遺構は削平されているが、甕棺は破壊をまぬがれ完全に残っていた。小児棺であり、棺の組合せは上棺が鉢、下棺は壺である。下棺は頸部を打ち欠いている。接口部には粘土の目張りを施している。掘形は2段になっており、1段目の掘形は不整な長方形を呈し、長さ100 cm、幅80cmを測る。1段目の掘形の南西端から斜めに掘込み、棺を埋置している。主軸をN-74°-Eにとり、埋置角度は29°を測る。

上 甕

鉢形の土器で、器高21.9cm、口径31.5cmを測る。口縁部は外側に張り出し、内面はわずかにつまみ出している。口縁部上面はやや外傾する。底部はわずかに上底となる。胴部には断面三角形の突帯を1条巡らす。底部付近に穿孔がみられる。

調整は外面の胴上半はヨコナデ、下半はミガキである。内面はナデである。

下 甕

壺形土器で、口縁部を打ち欠いている。残高35.9cm、胴部最大径43.1cmを測る。器形はやや肩が張る球形で、底部付近は直線的にすぼまる。胴部最大径は肩部やや下にある。底部を欠損する。肩部に断面三角形の突帯を1条巡らす。

調整は外面がミガキで、内面は

ナデである。内面底部に板状工具の圧痕がみられる。

(2)土墳墓 (Fig. 15)

調査区の南東部に位置し、3号甕棺の北側に接する。遺構は削平を受けており、とくに南側から西側にかけては大きく削られている。

主軸をほぼ東西にとり、長さ134 cm、幅64cmを測る。深さは48cmが遺存する。平面プランは長方形を呈するが、東側がやや広い。

底面は水平であるが、中央部が若干深くなっている。

遺構内からの出土遺物は無かった。

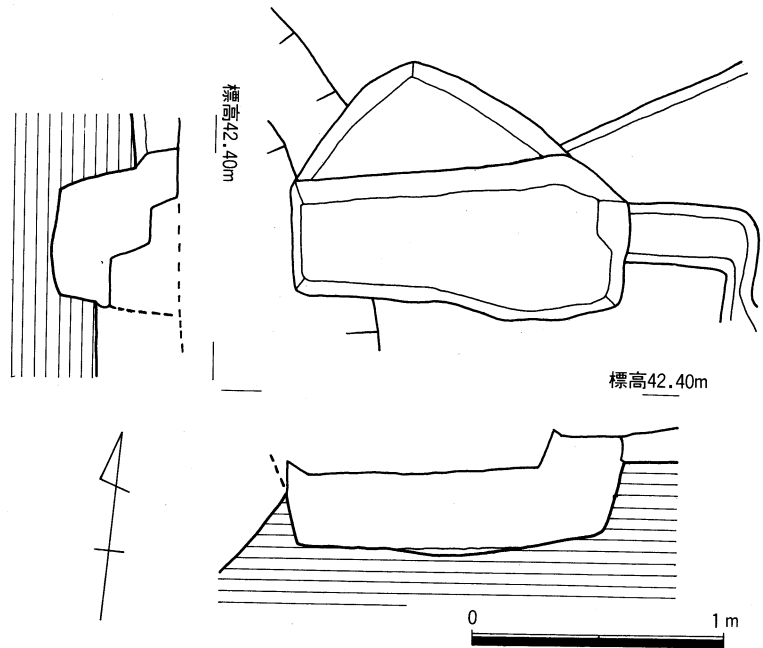


Fig. 15 土墳墓実測図 (1/30)

(3)土坑

1号土坑 (Fig. 16)

調査区の中央部に位置し、4号甕棺の南約4 mに位置する。

主軸を北東-南西にとり、一部調査区外に広がっている。調査区内では長さ150 cmを検出した。幅60cmを測る。深さは56cmが遺存する。平面プランは隅丸長方形を呈し、中央部がやや狭くなる。

底面は水平で、中央部にピットがある。

遺構内からの出土遺物は無かった。

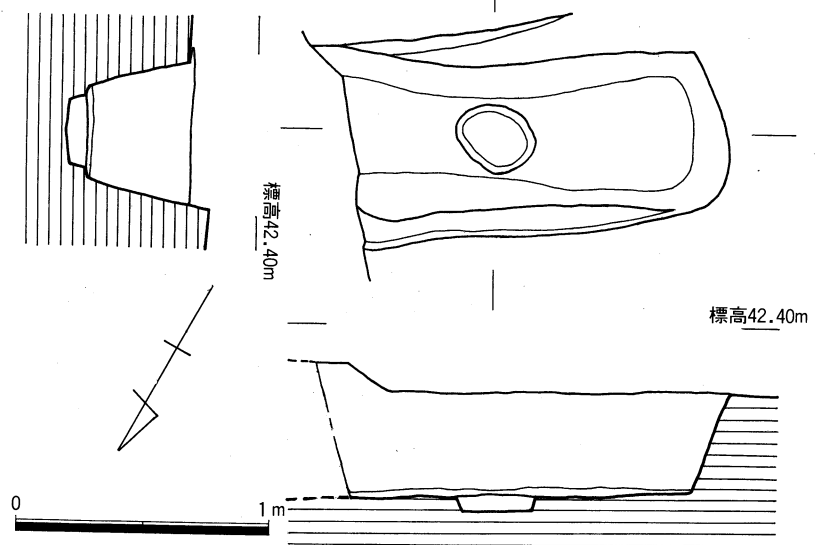


Fig. 16 1号土坑実測図 (1/30)

2号土坑 (Fig. 17)

調査区の南東部に位置し、2号甕棺の東側に隣接する。

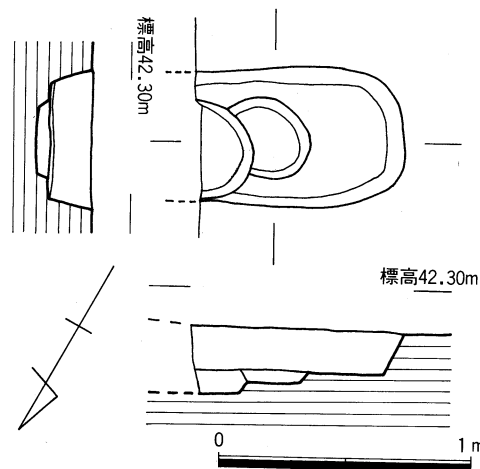


Fig. 17 2号土坑実測図 (1/30)

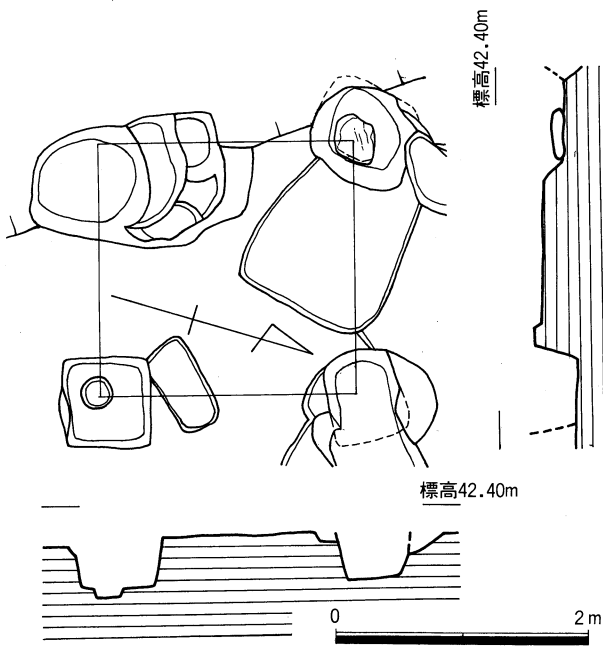


Fig.18 掘立柱建物実測図(1/60)

主軸をほぼ北東—南西にとり、一部調査区外に広がっている。調査区内では長さ80cmを検出した。幅58cmを測る。深さは約20cmが遺存する。平面プランは隅丸長方形を呈する。底面は水平で、中央部にピットがある。遺構内からの出土遺物は無かった。

(4)掘立柱建物 (Fig. 18)

調査区の中央やや北西側に位置し、4号甕棺の東側に隣接する。現状では1間×1間であるが、西側が削平により失われている可能性もある。柱間は約2mである。柱穴のプランは方形のものや、不整形のものがあり一定しない。礎盤に使用した石が残るものもある。柱穴内から土器片が出土したがいずれも細片

であり、図示し得なかった。

(5)その他の出土遺物 (Fig. 19、P.L. 5)

1～4は6号甕棺内から出土した。1は軒丸瓦の瓦当である。複弁の八弁蓮華文瓦である。蓮子は1+8で、蓮華文の割り付けが不均等で右横の花弁はやや小さい。瓦当面の復元径は、17.6cmで

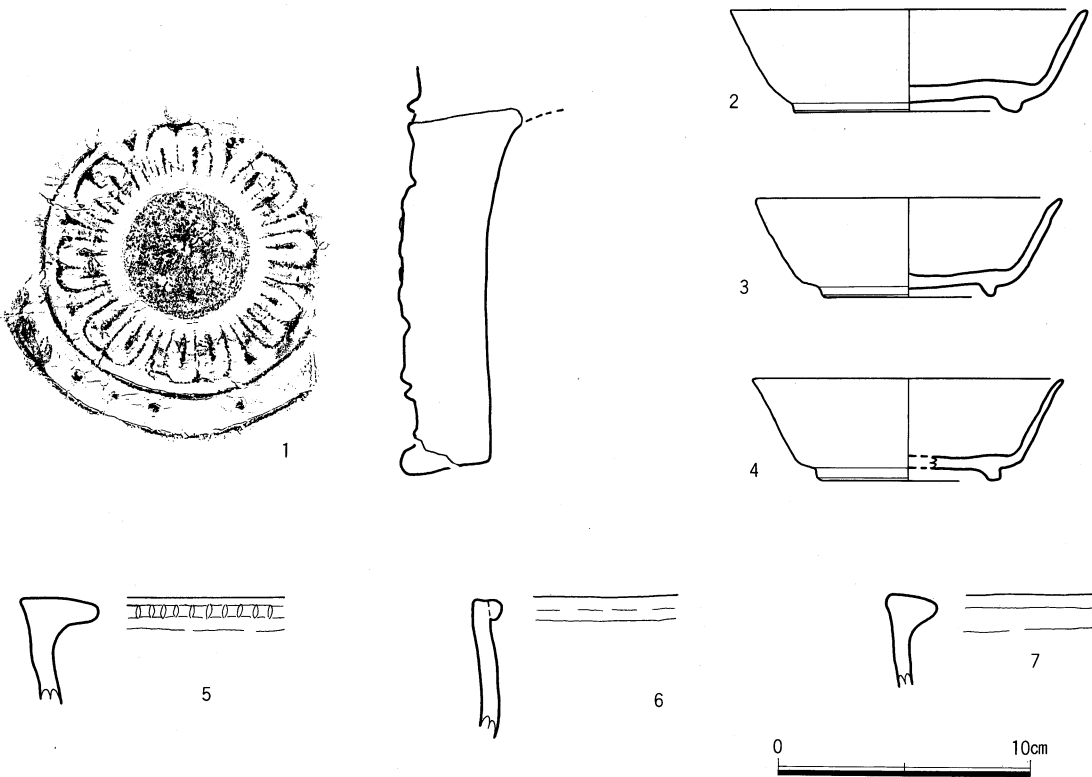


Fig.19 出土遺物実測図(1/3)

ある。2～4は須恵器の高台付杯である。2は器高8.8 cm、口径13.8cm、3は器高3.9 cm、復元口径11.8cm、4は器高4.0 cm、復元口径12.0cmを測る。調整はいずれも体部内外面ヨコナデである。

5～7は遺構検出時の出土である。いずれも弥生土器の甕の口縁である。5は口縁が外に張り出し、口縁端部に刻み目を施す。6は口縁端部に粘土紐を貼りつけ、肥厚させる。7は口縁部の断面が三角形を呈する。

3. 小結

高祖榎町遺跡の主体をなす甕棺墓について簡単にまとめてみたい。

甕棺は8基が検出されているが、その位置関係から3群にグルーピングできる。調査区南東部に位置する1～3号甕棺をA群、中央部に位置する4号甕棺をB群、北西部に位置する5～8号甕棺をC群とする。A群はそれぞれ3 m前後の間隔を持ち、主軸方向は一定していない。1号、3号が成人用の大型の甕棺を使用し、2号は下甕に大型の壺、上甕に成人用の大型の甕棺を使用している。B群は4号1基のみであるが、4号の西約2 mに位置する土坑が甕棺の抜き取り跡の可能性があり、これを含めると2基となる。4号は成人用の大型の甕棺を使用している。C群は成人棺2基と小児棺2基からなる。成人棺2基は近接しており、主軸もほぼ同じである。小児棺も掘形の存在を考えると成人棺に接して埋葬されており、位置関係からみるとグループとしてまとまっている。棺の構成は6号が上甕、下甕ともに成人用の大型の甕棺を使用し、7号、8号は鉢と壺の組合せである。これらのことから本遺跡の甕棺墓は数基ごとのグループが点在していたと考えられる。

次に甕棺の時期についてであるが、3号、6号上下棺は細部に若干の形態差がみられるものの、金海式に相当するものであろう。1号上下棺は汲田式までは下らないと考えられる。よって本甕棺墓地の営まれた時期は、前期末～中期初頭であると考えられる。2号上棺は時期の判断に苦しむが、ほぼ同時期と考えてよいのではないだろうか。

IV. 高祖大鷲遺跡

1. 調査の概要

高祖大鷲遺跡は標高60mの小高い丘陵上に位置する。本遺跡はⅠ区とⅡ区とに分けて調査を行った。

Ⅰ区は縦114 m、横15mを計り、調査面積は1,270 m²である。Ⅰ区には古墳2基、住居跡1棟、木棺墓3基、土坑2基、溝4条、落ち込み状遺構1基、ピット多数を検出した。1号墳、2号墳ともに円墳で主体部は横穴式石室である。両古墳ともに削平が著しかった。木棺墓は3基とも削平を受けていたが、1号、2号木棺墓は比較的残りが良かった。しかし、3号木棺墓は削平が著しかった。その他、住居跡、溝、落ち込み遺構等も著しく削平を受けていた。多数のピットも検出されたものの、掘立柱建物は確認できなかった。

Ⅱ区は縦48m、横22mを計り、調査面積は960 m²である。Ⅱ区には古墳1基、住居跡1棟、土坑6基、溝2条、ピット多数を検出した。3号墳は円墳で主体部は横穴式石室である。3号墳も削平、攪乱が著しかった。その他、住居跡、土坑、溝等も削平を受けていた。多数のピットも検出されたものの、掘立柱建物は確認できなかった。

2. Ⅰ区の調査

(1) 1号墳

本墳はⅠ区南端に位置する。古墳の前面にあたる南西側は水田、畑等の造成により階段状になっていた。墳丘も水田、畑等の造成により著しく削平を受けており、表土（耕作土）の下層に地山が確認された。盛土は検出されなかった。石室も破壊が著しく、石材も腰石を数個残すのみで、ほとんど抜き取られていた。

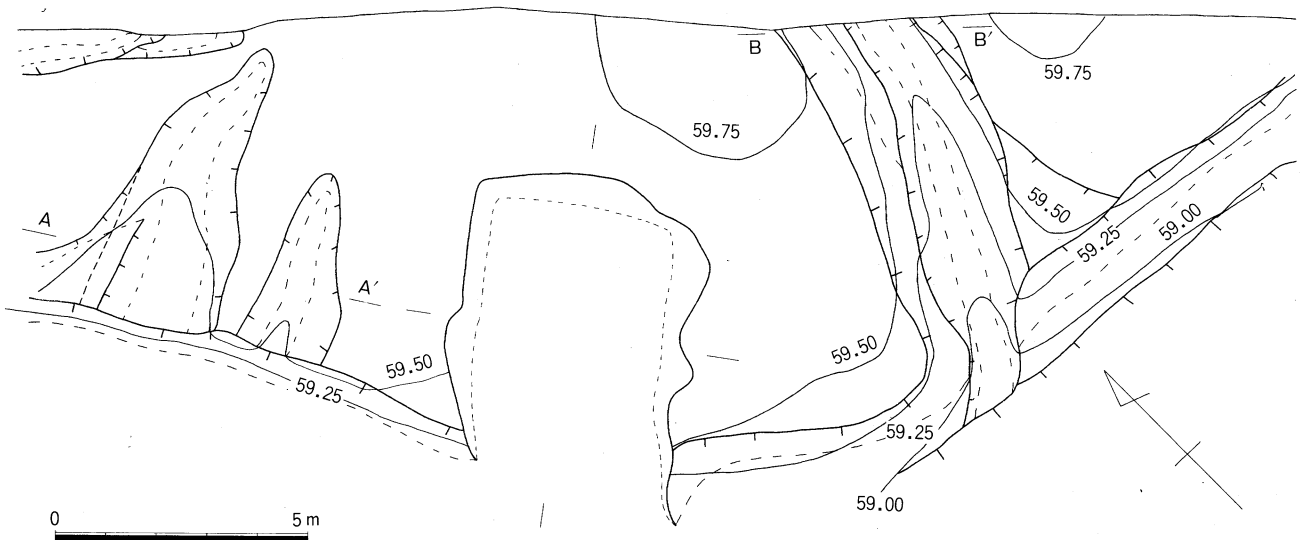


Fig. 20 1号墳地山整形測量図(1/150)

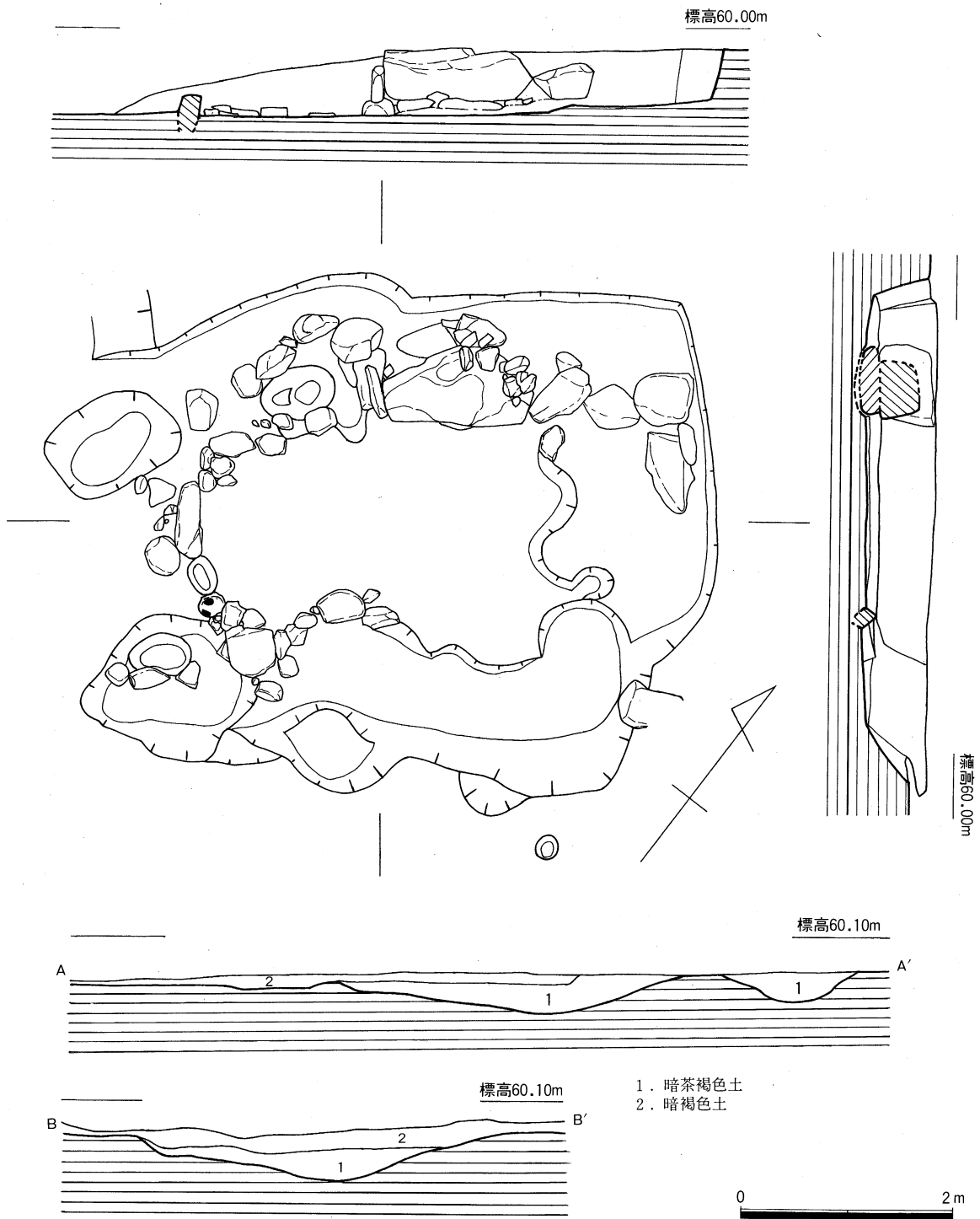


Fig.21 1号墳石室・周溝断面実測図(1/60)

i) 墳丘 (Fig. 21、P.L. 7)

墳丘は、水田、畑等の造成によりすべて失われていた。また、地山整形面までも削平を受けている。そのため、墳丘の構築状況は不明である。ただし、石室の主軸より周溝まで約7m測ることから直径14mの円墳であったと考えられる。

周溝は、北側が幅約2.8m、深さ約35cm、南側が幅約2.9m、深さ約45cmを測る。

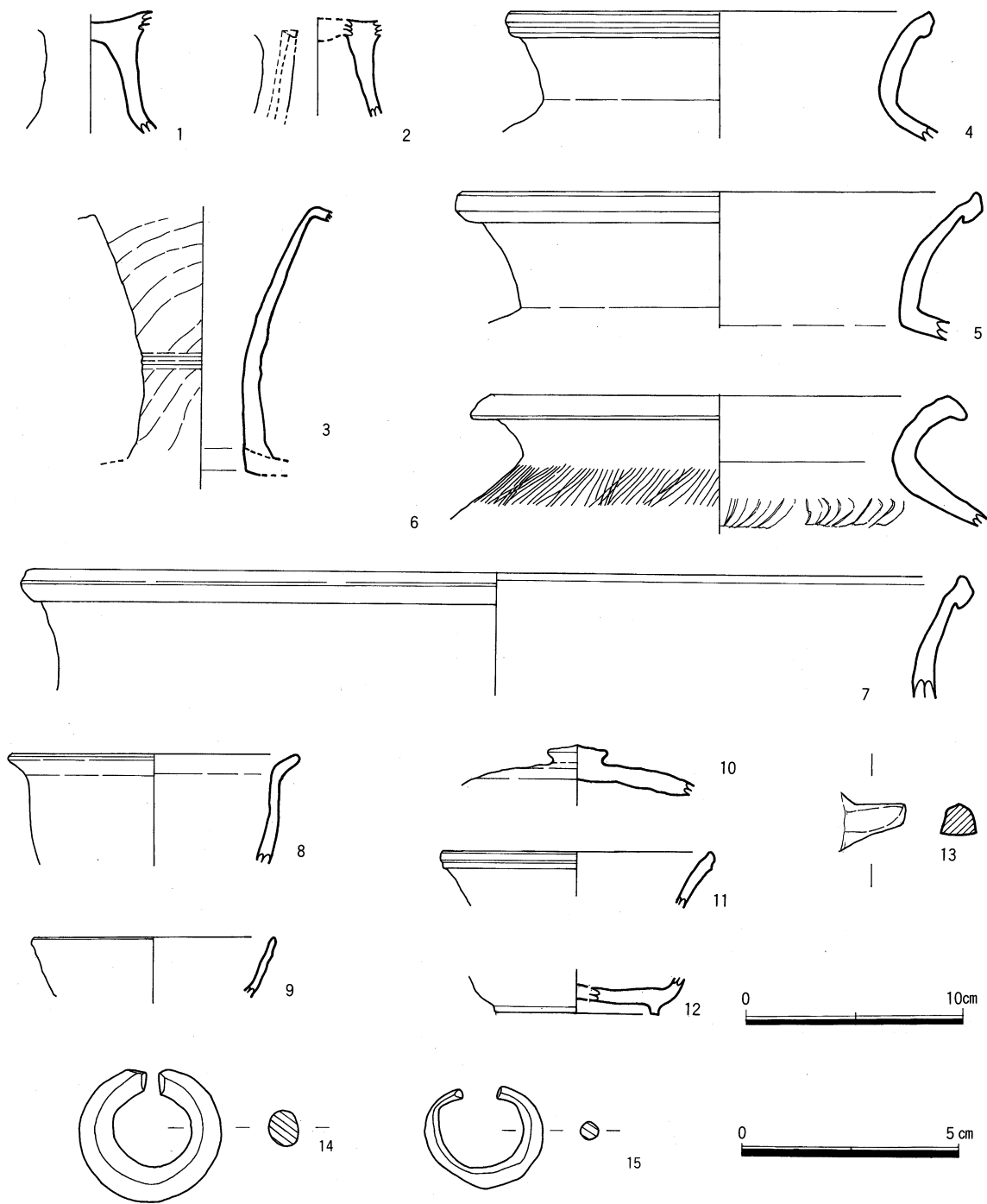


Fig.22 出土遺物実測図(1/3・2/3)

ii) 墓 墳 (Fig. 21、P L. 7)

墓墳は一部攪乱削平により破壊されている。平面形は長さ5.9 m、幅4.9 mの不整な長方形である。掘込みは墳丘部の地山整形面までもが削平を受けているため旧状については不明である。ただし、検出状況からは1段の掘込みが確認できている。なお、一部腰石が残存している部分から推測すると、石材の後面との間隔は約50 cmほど測ると思われる。

iii) 横穴式石室 (Fig. 21、P L. 7)

南東に開口する横穴式石室である。石室の大半が破壊されており、腰石のわずか3カ所のみが残

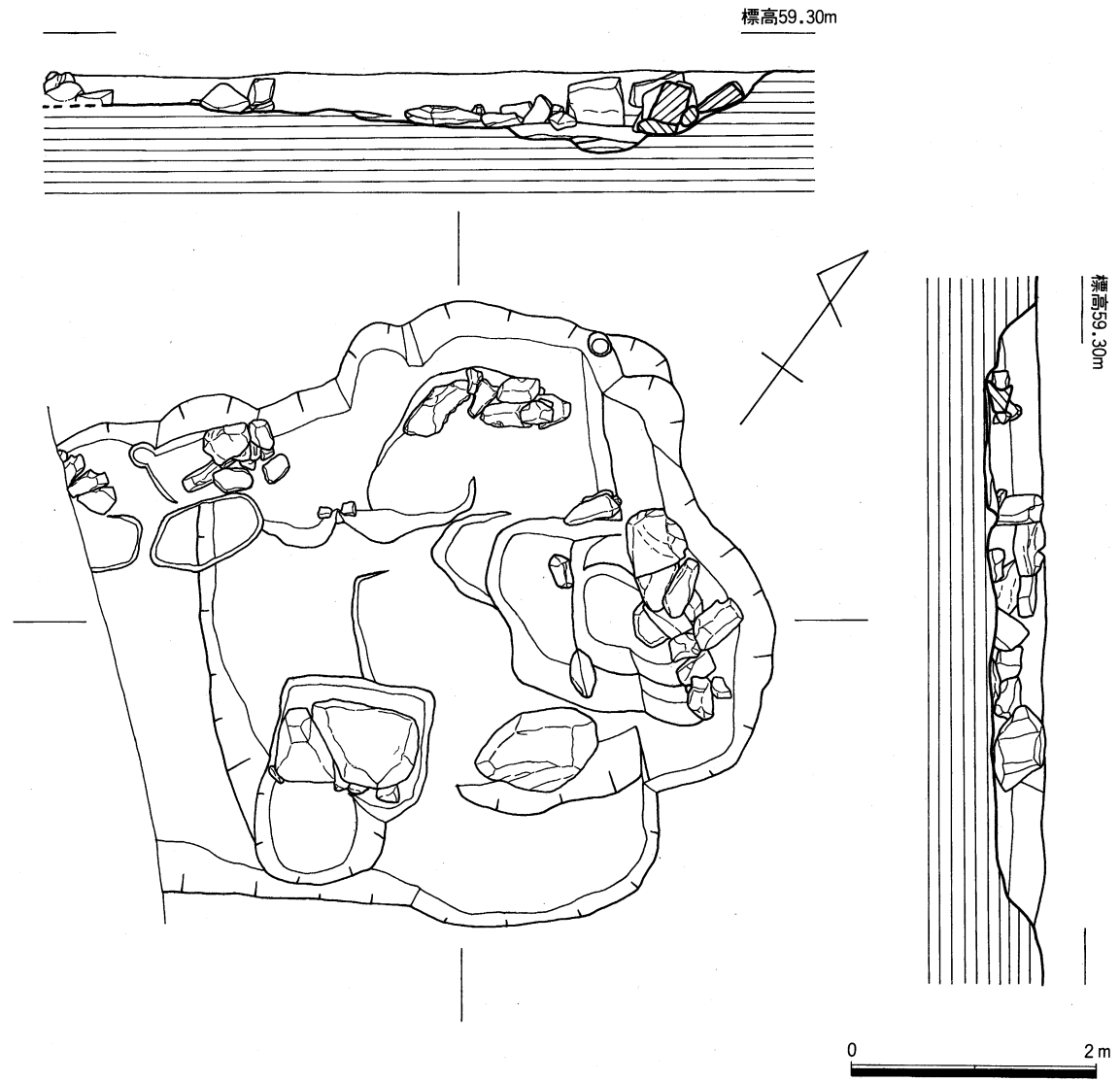


Fig.23 2号墳石室実測図(1/60)

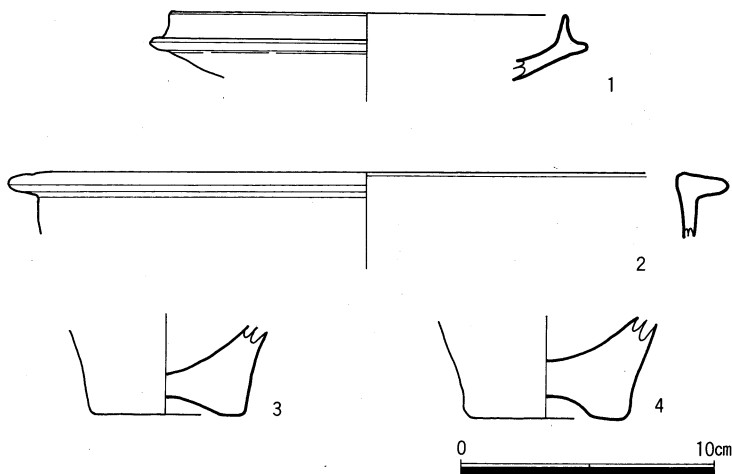


Fig.24 出土遺物実測図(1/3)

存する状況である。

腰石の敷石の残存状況及び腰石の抜き跡から推測すると、玄室はほぼ長方形を呈し、長さ3.2 m、幅2 mを測ったと推定される。主軸をS-52°-Wにとる。

iv) 出土遺物

(Fig. 22)

墳丘は残存状況が悪く、土器等の遺物は出土しなかった。しかし、周溝からは多数の土師器、須恵器を出土した。ただし、出土した土

器の大半が細片ばかりで実測し得たのは、わずか数点であった。1は土師器で東側周溝より出土した。高杯の脚部である。風化のため調整等は不明である。3は須恵器で東側周溝より出土した。長頸壺の頸部である。口頸部の中央には2条の浅い沈線がめぐる。調整は口頸部内面はヨコナデ、口頸部外面はシボリの後、その上からヨコナデが施されている。5は須恵器で西側周溝より出土した。甕の口頸部である。復元口径は23.6cmを測る。調整は口頸部内面から外面にかけてヨコナデ、口頸部内面と体部内面にかけてタタキが施されている。8は土師器で西側周溝より出土した。小型の甕の口縁部及び体部の一部である。復元口径は13cmを測る。調整は体部内面はナデ、口縁部は内、外面ともにヨコナデ、体部外面はナデが施されている。

石室からは土師器、須恵器、耳環、鉄器等が出土した。9は須恵器で高杯の口縁部であろうか。復元口径は11cmを測る。調整は内、外面ともにヨコナデが施されている。10は須恵器の蓋である。調整はつまみの部分を含み内、外面ともにヨコナデが施されている。

本墳周辺からも多数の土器片が出土した。なかでも羨道部及び墓道と想定し得る場所から出土した遺物について説明する。11は須恵器で甕の口縁部である。復元口径は12cmを測る。調整は内、外面ともにヨコナデが施されている。2は須恵器で長脚高杯の脚部。長方形スカシを配している。調整は外面にヨコナデ、内面にナデが施されている。6は須恵器で甕の口縁部である。復元口径は21cmを測る。調整は体部内面はタタキメ、口縁部内、外面ともにヨコナデ、体部外面にタタキメが施されている。4は須恵器で甕の口縁部である。復元口径19.2cmを測る。調整は内、外面ともにヨコナデが施されている。7は須恵器で大型の甕の口縁部である。復元口径42.6cmを測る。調整は内、外面ともにヨコナデが施されている。12は須恵器で高台付椀の一部分である。13は土師器では甑の把手と考えられる。祭祀用のミニチュア土器の可能性もある。14、15は耳環である。14は長径3.3 cm、短径2.9 cmの楕円形で、部分的に金箔が残る。15は長径2.6 cm、短径2.3 cmの楕円形で、風化が激しく歪んでいる。

(2) 2号墳

本墳はI区調査区のやや北端に位置する。1号墳とは約60mの間隔を持っている。古墳の後面にあたる北東は水田、畑等の造成によりかなり削平を受けている。前面にあたる南西側は造成のため崖状になっている。墳丘も造成により著しく削平、攪乱を受けており、表土（耕作土）の下層に地山が確認され、盛土は検出されなかった。石室も腰石を数個残すのみでほとんど破壊されていた。

i) 墳丘 (Fig. 23、P L. 7)

墳丘は耕地造成のためすべて失われていた。また、地山整形面までも削平を受けている。そのため墳丘の構築状況及び地山整形面も不明である。周溝の痕跡も検出されず、本墳の墳丘規模は全く不明である。

ii) 墓壙 (Fig. 23、P L. 7)

墓壙は一部攪乱、削平により破壊されている。規模は長さ5.4m、幅5.1mである。掘込みは墳丘部の地山整形面までもが削平を受けているため旧状については知り得ない。ただし、検出状況からは2段階の掘り込みが確認できる。

iii) 横穴式石室 (Fig. 23、P L. 7)

南東に開口する横穴式石室である。石室の大半が破壊されており、腰石のわずか2カ所のみが残存する状況であった。

腰石の敷石の残存状況及び抜き跡から推測すると玄室は長さ約3mを測ったと推測される。尚、主軸はS-51°-Wにとる。

iv) 出土遺物 (Fig. 24)

墳丘は残存状況が悪く土器等の遺物は出土しなかった。

石室からは土師器、須恵器を出土した。ただし、出土した土器の大半が細片ばかりで実測にし得たのはわずか数点であった。1は須恵器の杯の口縁部である。調整は内面にヨコナデ、外面は体部からヘラ削りが施されている。2は弥生土器の甕である。復元口径は24.4cmを測る。調整は摩擦が著しく不明である。3、4は弥生土器の甕の底部である。調整は摩擦が著しく不明である。

(3)住居跡

I区で検出した竪穴住居跡は計2棟である。いずれも平面が方形もしくは長方形プランを呈している。削平が著しいため遺構残存状況はあまり良くない。

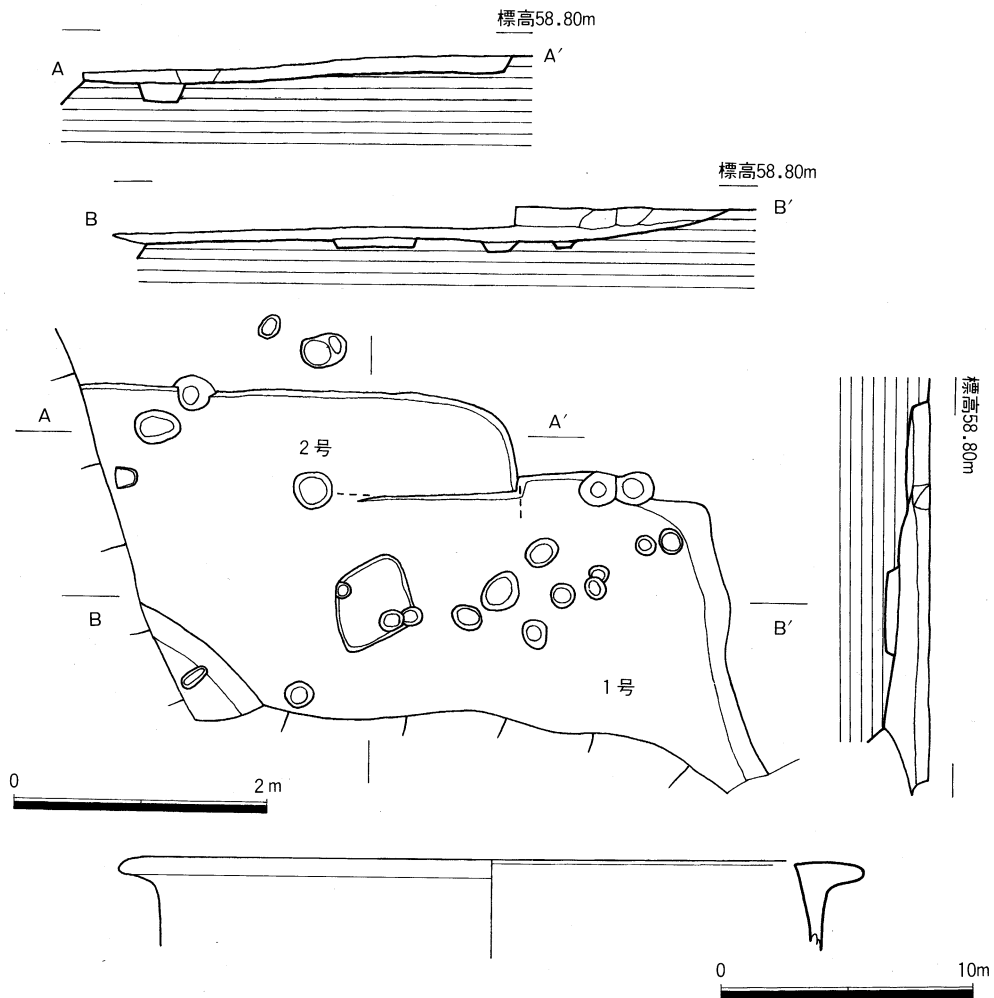


Fig. 25 1号・2号住居跡実測図(1/60)・出土遺物実測図(1/3)

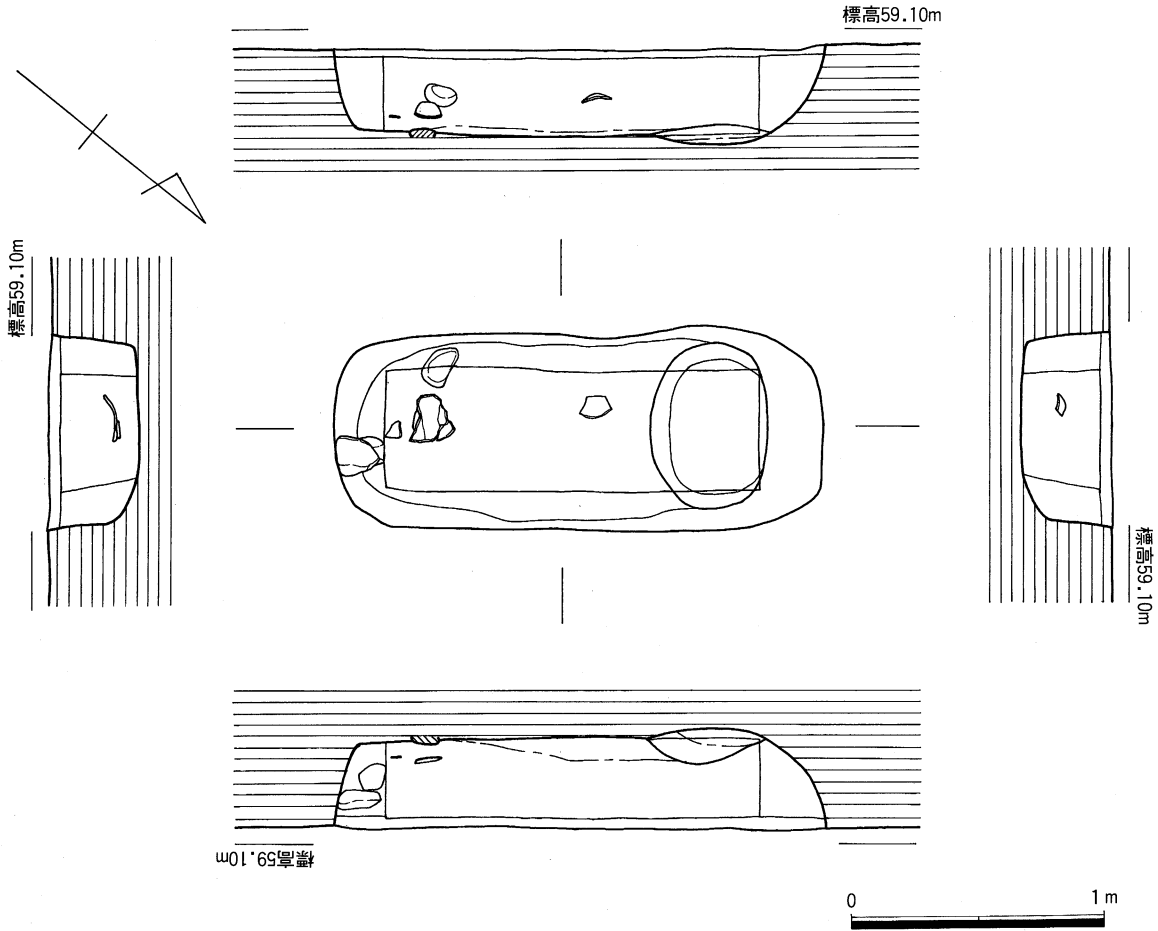


Fig.26 1号木棺墓実測図(1/30)

1号住居 (Fig. 25、P.L. 8)

調査区の南端部に位置し、2号住居を切っている。不整長方形の平面プランをなす住居跡である。削平のため主軸長は不明であり、長さ4.34m、幅2.24mが残存する。床面に数個の柱穴跡、及び不正方形の土坑を検出している。かまど、炉跡等は確認できなかった。埋土及び床面から土器が出土した。

2号住居 (Fig. 25、P.L. 8)

1号住居跡に切られている。不整形の平面プランをなす住居跡である。削平及び1号住居と切り合い関係のため規模は不明である。長さ3.40m、幅72cmが残存する。床面からは数個の柱穴が検出された。かまど、炉跡等は確認できなかった。柱穴から土器が出土したが細片ばかり

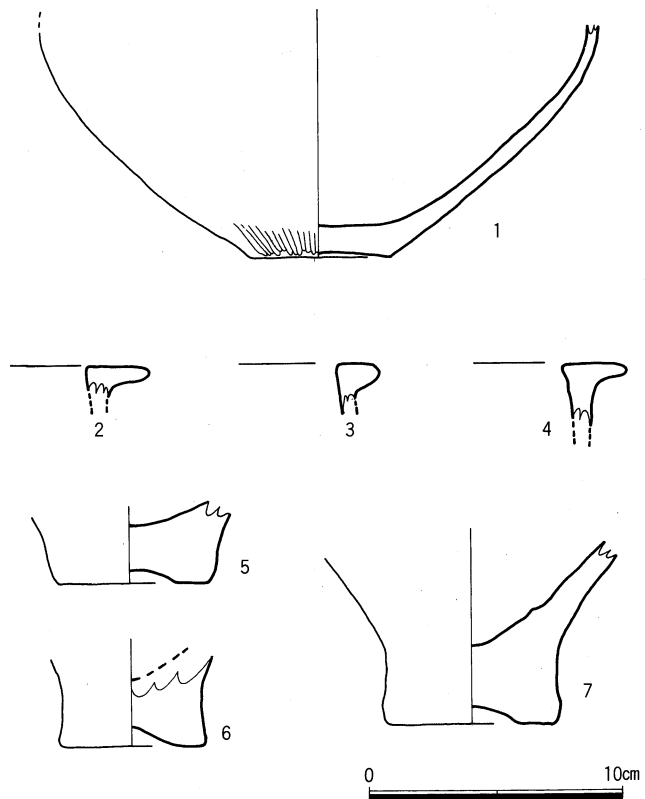


Fig.27 出土遺物実測図(1/3)

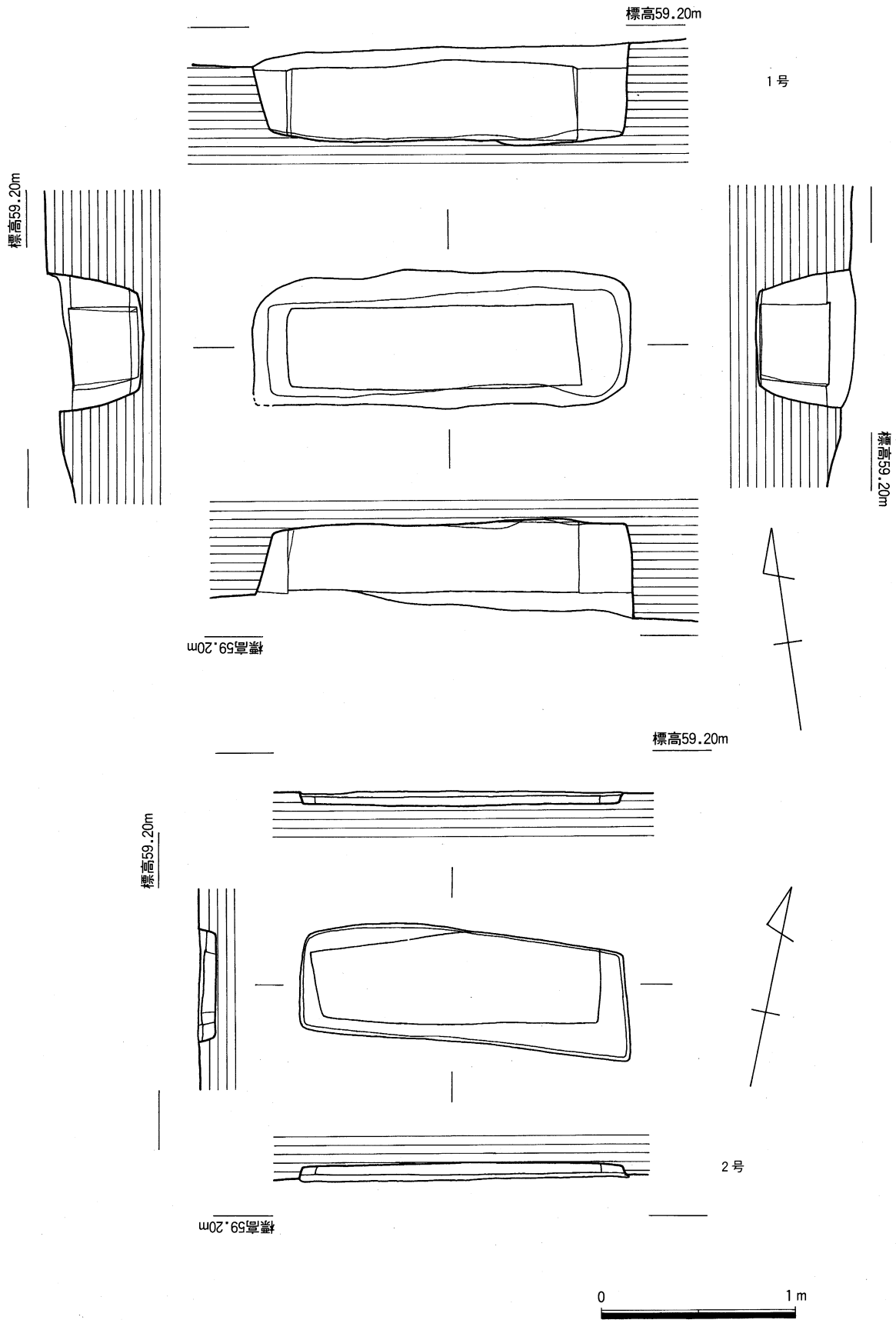


Fig.28 2号・3号木棺墓実測図(1/30)

りで図示し得なかった。

出土遺物 (Fig. 25)

1号墳住居の床面より出土した弥生土器の甕である。復元口径は24cmを測る。調整は風化のため不明である。

(4)木棺墓

I区で検出した木棺墓は計3基である。いずれも平面が長方形プランを呈している。3号木棺墓は削平が著しく、残存状況はあまり良くない。

1号木棺墓 (Fig. 26、P.L. 8)

調査区の中央部やや南側に位置し、2号住居とは北西約20mの間隔を持つ。主軸方向をN-39°-Wに置く。墓壙は長さ1.95m、幅80cmの隅丸長方形を呈し、現存深さ35cmを測る。底面は長さ1.63m、幅70cmを測る隅丸長方形を呈し、北端がやや深くなっている。墓壙の壁はやや傾斜をもち、断面形は舟底状をなす。棺の規模は長さ1.48m、幅50cmで、現存深さ35cmを測る。遺構上部は削平を受けており、本来の形状は知り得ない。壙内からは土器片が出土した。

出土遺物 (Fig. 27)

1は弥生土器で壺の胴部である。胴径は24cmを測る。調整は器面風化のため不明である。1号木棺墓の床面より出土した。2、3は弥生土器の甕の口縁で、2は墓壙より、3は棺内の埋土より出土した。5～7は弥生土器の甕の底部で、棺内の埋土より出土した。3～6は器面風化のため調整は不明である。

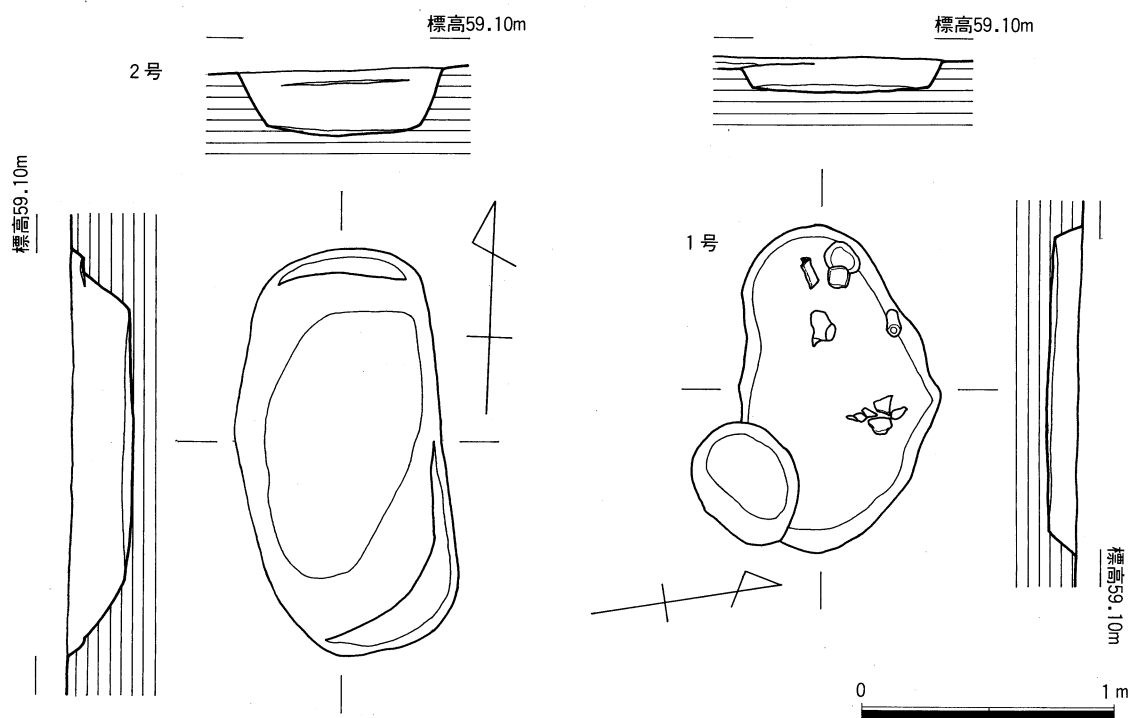


Fig.29 1号・2号土坑実測図(1/30)

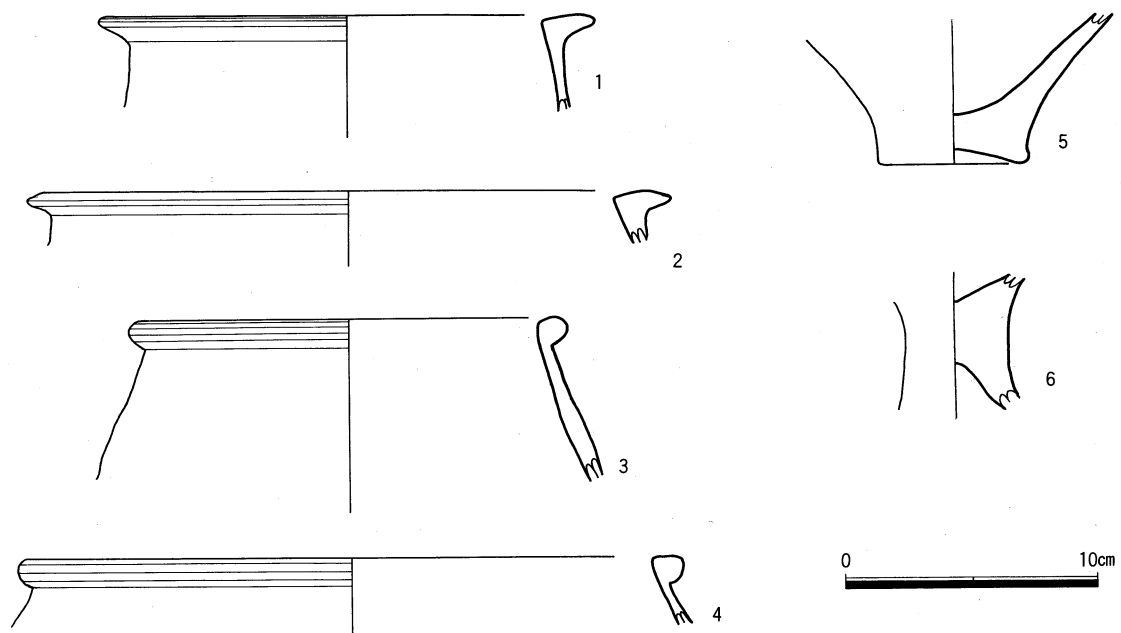


Fig.30 出土遺物実測図(1/3)

2号木棺墓 (Fig. 28、P L. 8)

調査区の中央部に位置し、1号木棺墓とは東約7mの間隔を持つ。主軸方向をN-83°-Wにとる。墓壙は長さ1.93m、幅70cmの隅丸長方形を呈し、現存深さ50cmを測る。底面は長さ1.82m、幅49cmを測る隅丸長方形を呈し、ほぼ水平である。墓壙の西側の壁はやや傾斜を持ち、断面形は舟底状をなす。棺の規模は長さ1.49m、幅43cmで、現存深さ40cmを測る。遺構上部は削平を受けており、本来の形状は知り得ない。壙内からは土器片が出土した。

出土遺物 (Fig. 27)

4は2号木棺墓の埋土より出土した。弥生土器の甕の口縁部で、調整は風化のため不明である。

3号木棺墓 (Fig. 28)

調査区の北側に位置し、2号木棺墓とは北西約45mの間隔を持つ。主軸方向をN-78°-Eにとる。墓壙は長さ1.67m、幅59cmの長方形を呈し、現存深さ10cmを測る。底面はほぼ水平である。棺の規模は長さ1.46m、幅50cmで、現存深さ10cmを測る。遺構は著しく削平を受けており、本来の形状は知り得ない。壙内からは土器等の遺物は出土しなかった。

(5)土坑

I区調査区で検出した土坑は計2基である。いずれも平面が楕円形もしくは隅丸長方形プランを呈している。削平及び攪乱を著しく受けているため、遺構残存状況はあまり良くない。

1号土坑 (Fig. 29、P L. 8)

調査区のほぼ中央部に位置する。2号墳とは南東約20mの間隔を持つ。長さ130cm、幅80cmの楕円形を呈し、現存深さ10cmを測る。底面は長さ1.15m、幅70cmを測る楕円形を呈し、中央部付近が若干深くなっている。遺構上部は削平及び攪乱を著しく受けており、本来の形状は知り得ない。土坑内からは土器片が出土した。

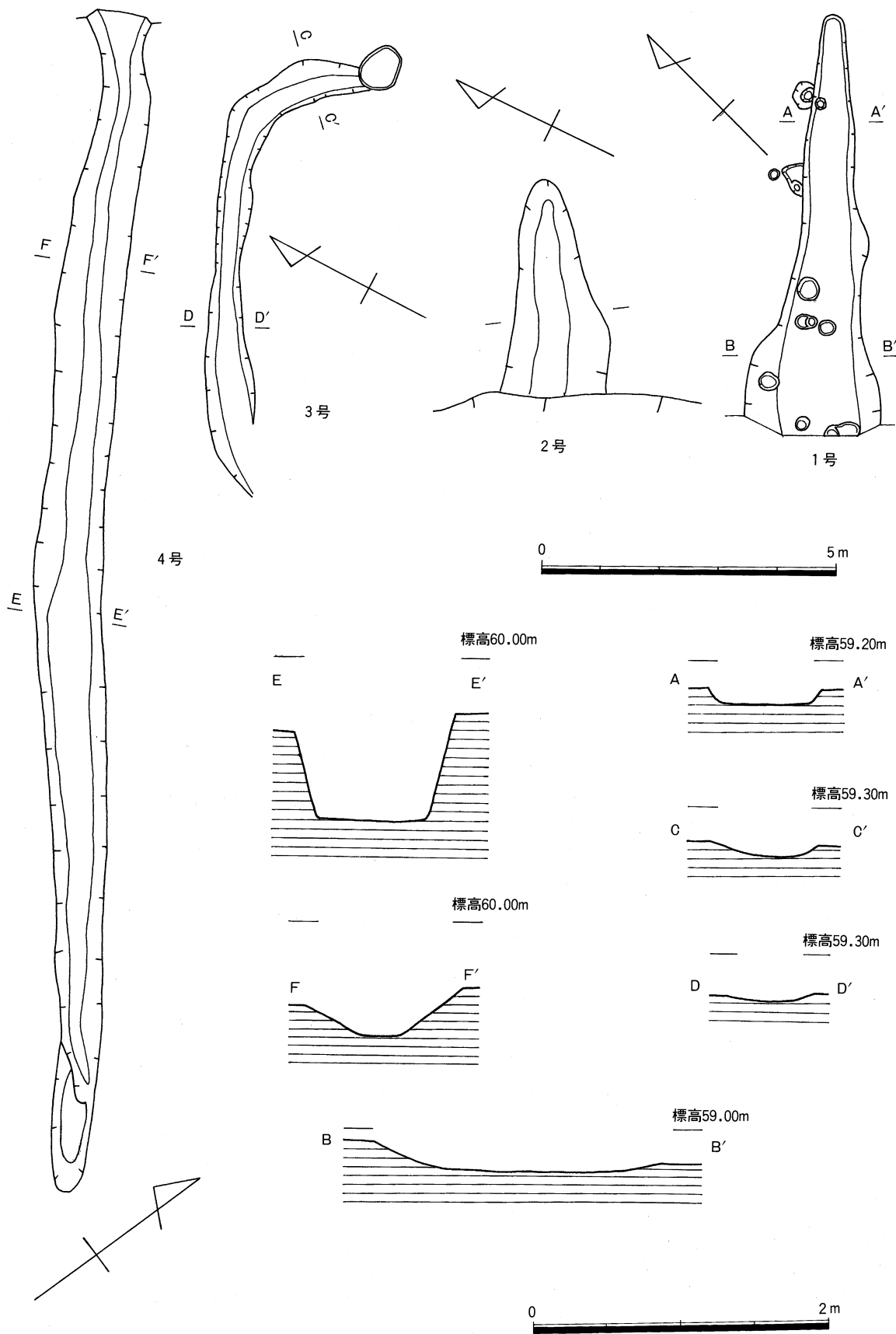


Fig.31 1~4号溝・断面実測図(1/100・1/40)

出土遺物 (Fig. 30)

1～6はすべて1号土坑の床面より出土した。いずれも弥生土器である。1～4は甕の口縁部である。1は復元口径15.4cmを測る。2は復元口径21cmを測る。3は復元口径15cmを測る。4は復元口径24cmを測る。5は甕の底部である。6は高杯の脚部である。いずれも調整は器面風化のため不明である。

2号土坑 (Fig. 29)

調査区の北端部に位置する。長さ1.60m、幅80cmの隅丸長方形を呈し、現存深さ25cmを測る。底面は長さ1.02m、幅57cmを測る楕円形を呈する。掘込みは部分的に2段になっており、断面形は舟底状をなす。遺構上部は削平を著しく受けており、本来の形状は知り得ない。土坑内からは土器片が出土したが細片ばかりで図示し得なかった。

(6)溝

I区で検出した溝は計4条である。いずれも削平を受けており、遺構の残存状況はあまり良くない。

1号溝 (Fig. 31)

調査区の中央やや北西側に位置し、1号土坑とは東約10m、2号墳とは西約11mの間隔を持つ。北東から南西に流れる溝で、長さ7mを検出し、現存幅2m、深さ20cmを測る。断面は浅い皿状をなす。溝内から土師器、須恵器片が出土した。

2号溝 (Fig. 21,31)

1号墳の墳丘内で検出した。北東から南西に流れる溝で長さ約4mを検出し、現存幅1.75m、深さ30cmを測る。断面はU字形を呈する。溝内からの出土遺物はなかった。

3号溝 (Fig. 31)

調査区のほぼ中央部に位置し、1号土坑と隣接する。南東から南西に緩やかに屈曲する溝で、長さ約8mを検出し、現存幅75cm、深さ10cmを測る。断面は浅い皿状を呈する。溝内からの出土遺物はなかった。

4号溝 (Fig. 31)

1号墳の北側で、周溝に隣接する。南東—北西方向の溝で、長さ20cmを検出し、現存幅1m、深さ70～40cmを測る。断面は逆台形を呈する。溝内から土師器、須恵器片が出土した。

出土遺物 (Fig. 33)

18～20は1号溝の出土で、いずれも弥生土器である。18は高杯の脚部である。19、20は甕の底部である。20はかなりの上底となる。いずれも風化が激しく、調整は不明である。

21は4号溝の出土で、須恵器の杯である。体部内外面はヨコナデ、底部外面は回転ヘラケズリである。

(7)落ち込み状遺構 (Fig. 32)

調査区の中央部やや西側に位置する。2号墳と1号溝との間に位置し、前者とは西約5m、後者とは東約3mの間隔を持つ。長さ2.8m、幅3.8mを検出したが、一部調査区外に広がっている。深さは最も深いところで、約50cmを測る。不整形で内部に土坑、ピット等が多数存在する。遺構

標高59.20m

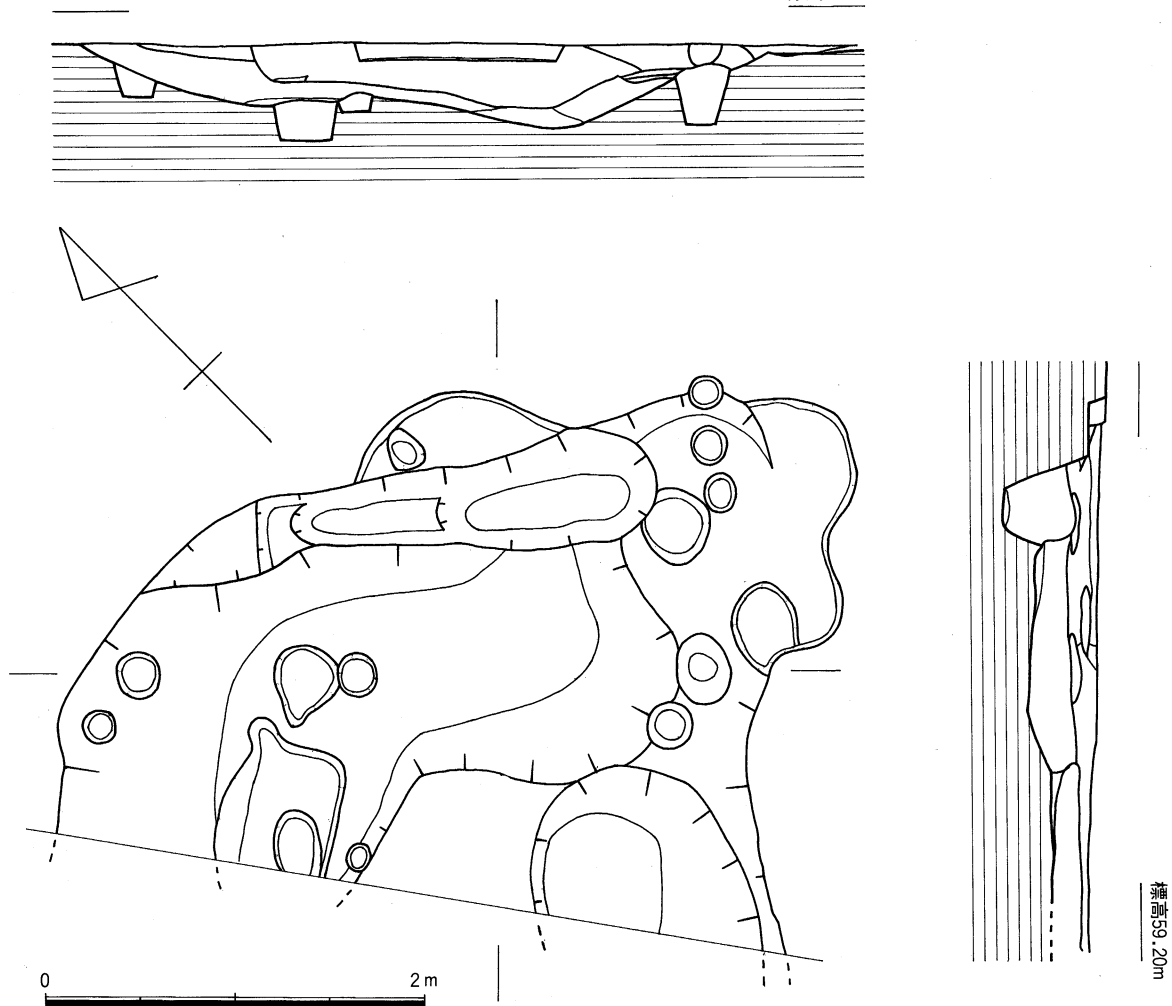


Fig. 32 落ち込み状遺構実測図(1/40)

内から土器が出土した。

出土遺物 (Fig. 33)

1、3～7、8～12、14、15はすべて遺構内埋土より出土した。1、3は甕の底部、4、5は壺の底部、6、7、9～12、14は甕の口縁部である。1は体部内面にナデが施され、底部内面に指頭圧痕が確認できる。外面は体部にハケ目、底部にナデが施されている。4は体部内面にナデが施され、底部内面に指頭圧痕が確認できる。外面は体部から底面にかけてナデが施されている。2、5は器面風化のため調整は不明である。6、7、9～12は口縁部が逆L字状を呈する。6、7には口縁部やや下に断面三角形の突帯を巡らす。6は復元口径25.5cmを測り、7は復元口径26.6cmを測る。14は口縁が如意形を呈する。いずれも器面風化のため調整は不明である。

(8)その他の出土遺物 (Fig. 33)

I区調査区内から多数のピットが検出したが、建物跡とし確認するまでには至らなかった。ピットからは弥生土器、須恵器、土師器片を出土した。

2、8、13、15、16は弥生土器の甕である。2は底部の破片である。調整は体部内面から底部内

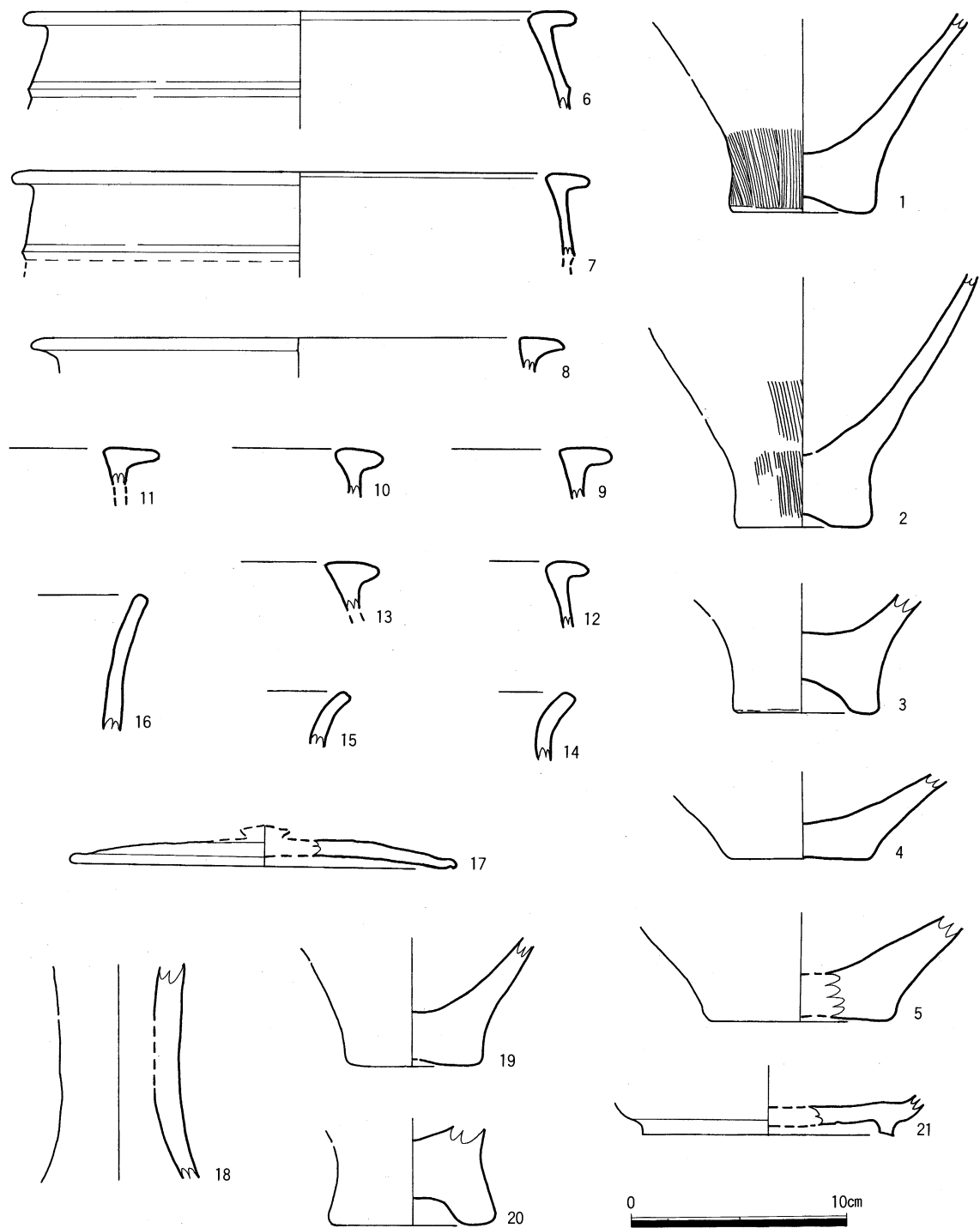


Fig.33 出土遺物実測図(1/3)

面にかけてナデ、体部外面から底面にかけてハケ目、底部外面はナデが施されている。8、13は甕の口縁部で逆L字状を呈する。8は復元口径24.4cmを測る。15は口縁が如意形を呈し、16は口縁がやや開く。いずれも器面風化のため調整は不明である。17は須恵器の蓋で復元径17.7cmを測る。外面は宝珠つまみから天井部にかけて削りが施され、天井部から口縁部にかけてヨコナデが施されている。内面は口縁部から天井部にかけてヨコナデ、天井部はナデが施されている。

3. II区の調査

(1) 3号墳

本墳はII調査区の中央部やや西側に位置する。墳頂部は標高約58mを測る。古墳の前面に位置する北西側は水田、畑の造成により崖状になっている。墳丘も後世の造成により攪乱、削平を受け、表土の下層にわずか60cmほどの盛土が検出されたにすぎない。石室は羨道部を除きほとんど破壊されていた。現況では径14m、高さ2mの円丘状をしていた。

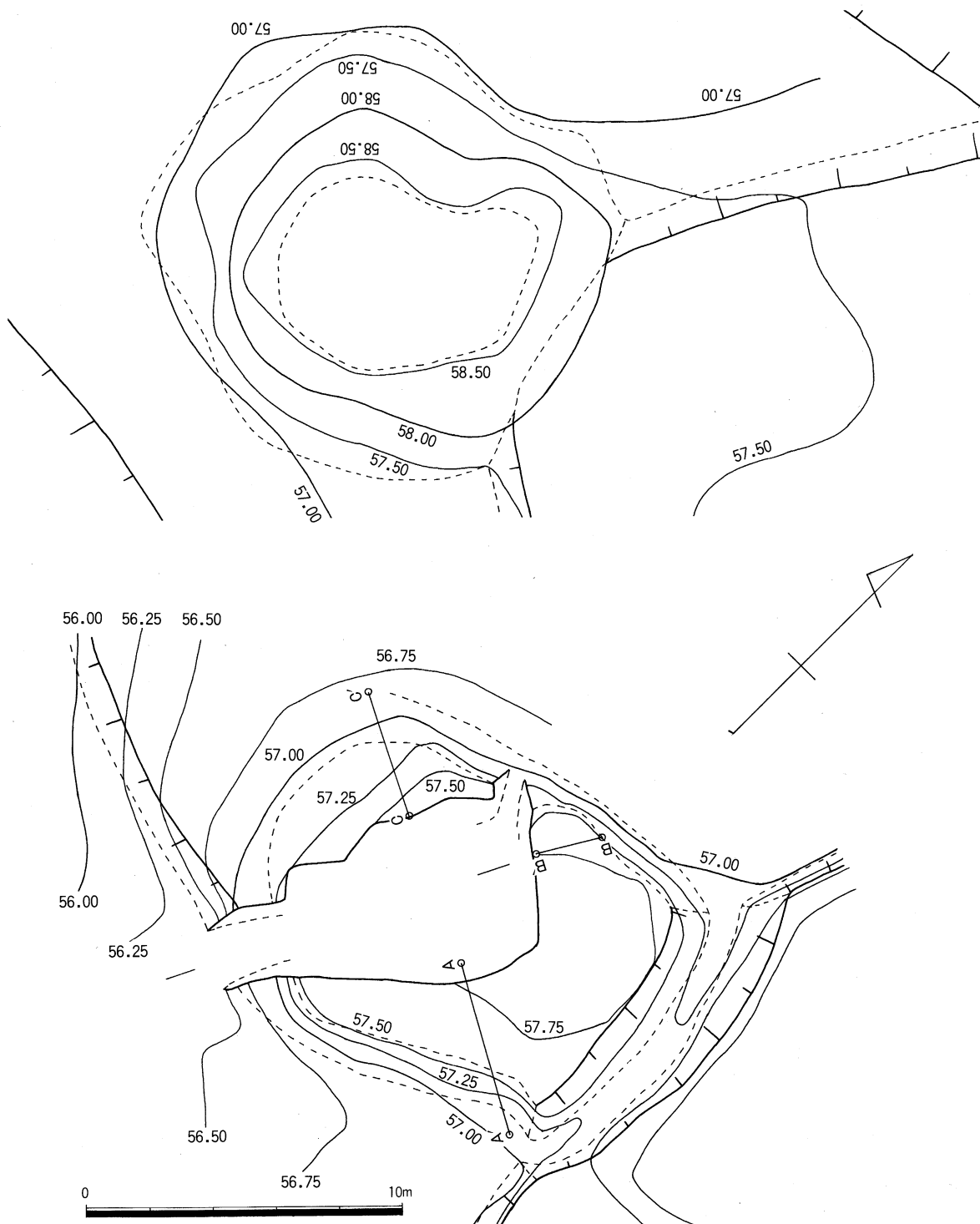


Fig. 34 3号墳現況・地山整形測量図(1/200)

i) 墳丘

(Fig. 34,35、
P L. 9)

墳丘は地山整形により造り出されたテラスを基底面として盛土が行なわれている。盛土の残存状況から、第1段階で石室の壁体を固定し、第2段階で天井を被覆し、墳丘の形を整える一般的な工程で築かれたと推測される。石室の主軸より周溝まで約8m測ることから直径約16mの円墳であったことがわかる。

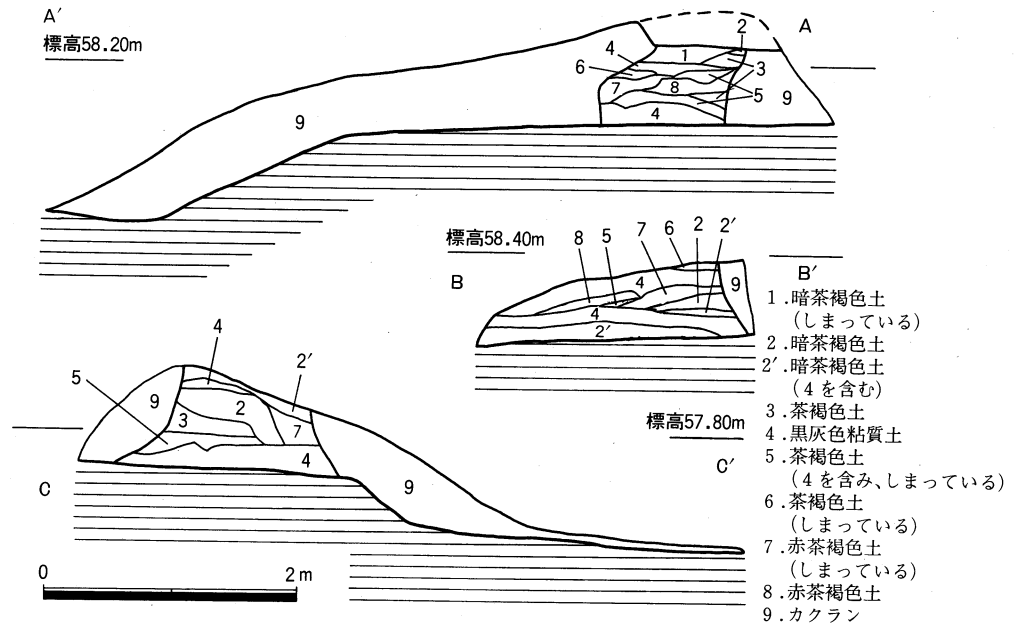


Fig. 35 3号墳墳丘断面実測図(1/60)

周溝は東側のみ検出された。幅約2m、深さ50cmを測る。なお、墳丘上から須恵器、土師器が出土した。

ii) 墓壇 (Fig. 36、P L. 10)

墓壇は後世の盗掘により一部破壊されている。盗掘坑は玄室の奥壁部分より北西側にのびている。平面形は直径10.5m、短径5.5mの隅丸長方形を呈する。掘り込みは盗掘及び攪乱のため本来の形状は知り得ないが、断面から一段の掘り込みが確認できる。なお、羨道部から推測すると石材の後面との間隔は約20cmほど測ると思われる。

iii) 石室 (Fig. 36、P L. 10)

南南西に開口する横穴式石室である。石室の大半が破壊されており、羨道部の一部のみが残存する状況である。腰石の抜き跡から推測すると玄室はほぼ長方形を呈し、長さ4m、幅2.2mを測ったと推測される。主軸はS-27°-Wに置く。石室内からも須恵器、土師器等が出土している。

iv) 墓道 (Fig. 36)

墓道は羨道前端から4mを検出した。幅1.7~2.3m、深さ1.15mを測る。この先にも続いていたようであるが造成のため削平を受け崖状になっている。なお、墓道の西側に落ち込み部が検出され須恵器等が出土した。

v) 出土遺物 (Fig. 37、P L. 11)

図示した遺物はすべて須恵器である。8は杯蓋で復元口径12.4cmを測る。天井部に1本の沈線がめぐる。外面は天井部までヘラ削り、口縁部にかけてヨコナデ、内面は口縁部から天井部にかけてヨコナデ、天井部はナデが施されている。9は器台の脚部である。外面に2本ずつ沈線をめぐらし、その間に櫛歯文を配する。透し窓も認められる。内面はヨコナデが施されている。いずれも石室内から出土した。5は杯でコップ形になると思われる。復元口径は8.8cmを測る。外面に2本の沈線をめぐらす。羨道部から出土した。1は器高25cm、口径10cm、胴部長径28.8cm、胴部短径22cm

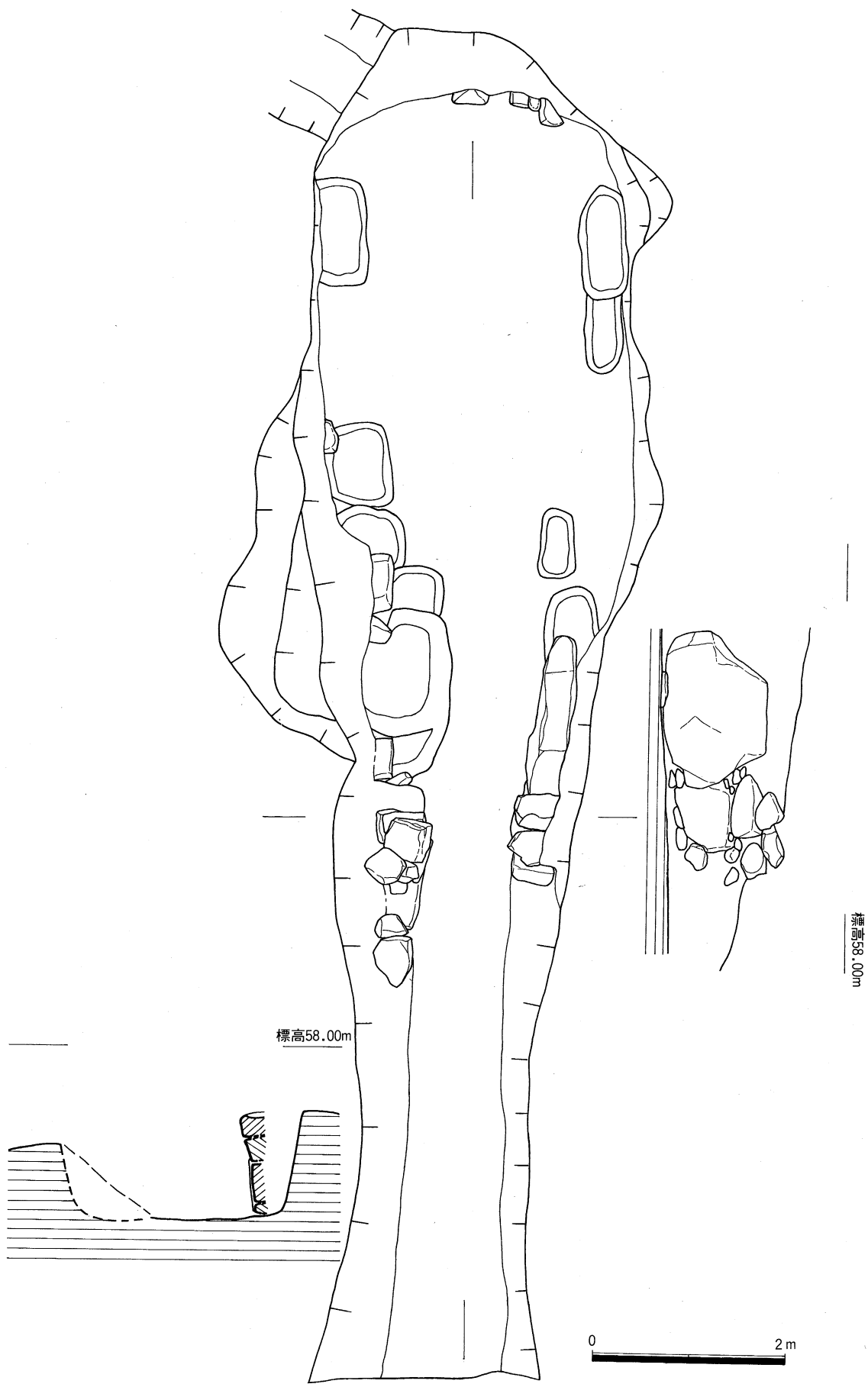


Fig. 36 3号填石室实测图(1/60)

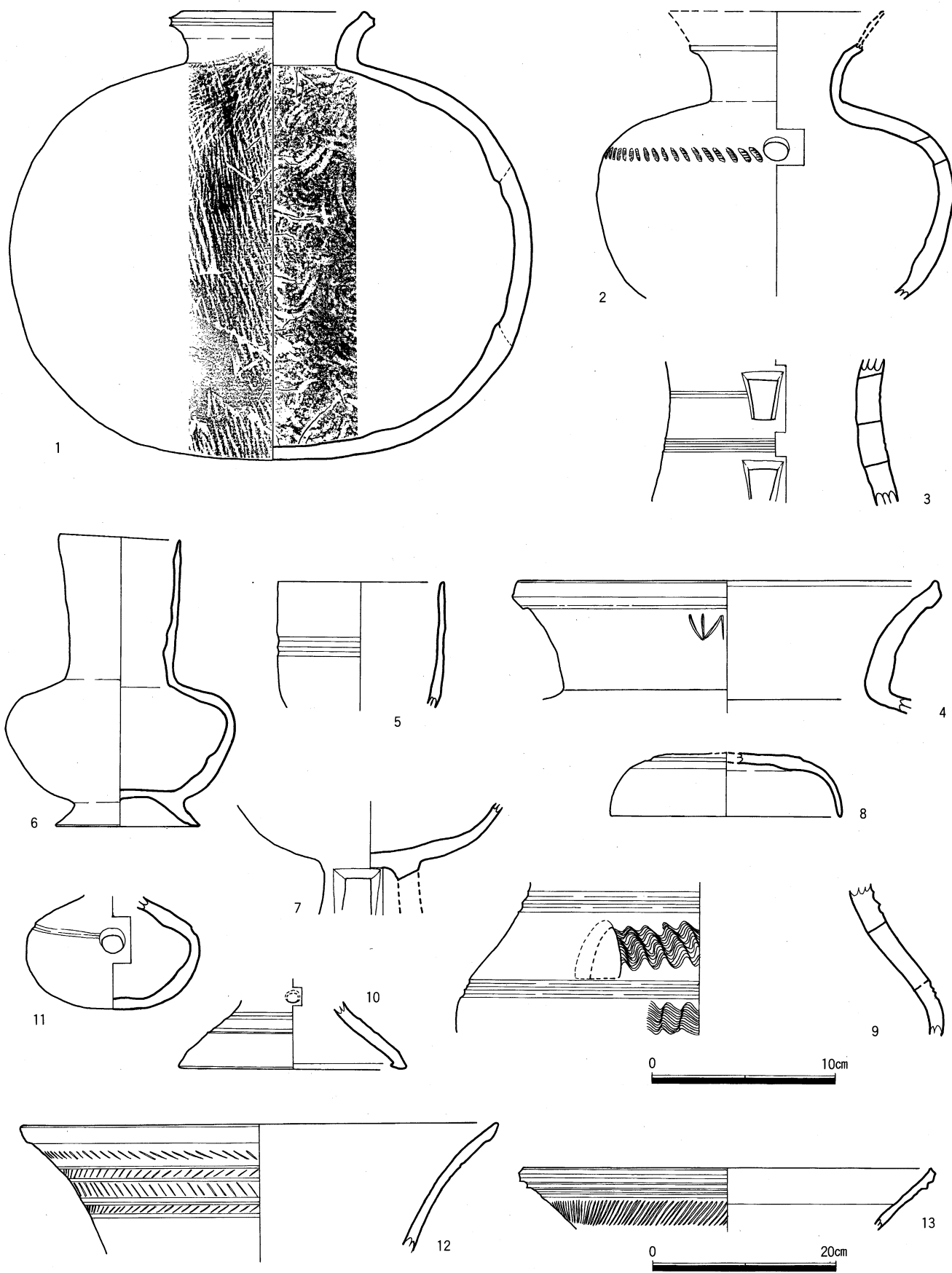


Fig.37 出土遺物実測図(1/3・1/6)

を測る。頸部は緩やかに外反しながら立ち上がる。胴部は楕円形を呈している。頸部は内外面ともにヨコナデが施されている。胴部外面には縦方向の叩き、胴部内面はほぼ全体に同心円状の当て具痕がみられ、その上からナデが施されている。3号墳西側より出土した。2は甕で口縁部及び底部を欠損する。復元胴径18.5cmを測る。体部中位やや上に櫛歯文を配する。口頸部内外面、体部中部外面までヨコナデの上に自然釉がかかる。体部中位から底部にかけてヘラ削りの後丁寧にナデである。4は甕の口縁部で復元口径22.5cmを測る。口縁部外面にヘラ記号がみられる。調整は内外面ともにヨコナデ、体部の内面はタタキメが施されている。6は長頸壺で器高15.7cm、口径6.5cm、胴径12.4cmを測る。焼成が不良で調整は不明である。10は脚の破片である。脚部中央部やや上に2本の沈線をめぐらす。内外面ともにヨコナデが施されている。11は甕の胴部で口頸部を欠損する。胴径は9.4cmを測る。体部の中央部やや上に一本の沈線をめぐらす。体部上部外面はヨコナデ、体部中央部外面から底部にかけてヘラ削りが施されている。いずれも3号墳西側の落ち込み部から出土した。

12は大甕の口縁部で復元口径52cmを測る。口縁部外面には4本の沈線をめぐらし、その間に櫛歯文を配する。内外面ともにヨコナデが施されている。13は大甕の口縁部で復元口径44.8cmを測る。外面に櫛歯文を配する。内外面ともにヨコナデが施されている。いずれも3号墳西側の落ち込み部付近から出土した。

3は高杯形器台の脚部で、外面には3本の沈線をめぐらす。また2段の透し窓が確認できる。内外面ともにヨコナデが施されている。7は高杯の脚部で基部から下に透し窓が認められる。体部内面から基部にかけてヨコナデ、基部外面から体部外面にかけてヘラ削り、体部上部外面はヨコナデが施されている。いずれも東側攪乱部より出土した。

(2)住居跡

Ⅱ区で検出した竪穴式住居跡は1棟である。長方形プランを呈している。削平を著しく受けているため遺構残存状況は良くない。なお、本遺構の他に住居跡と想定し得る遺構を検出しているがここでは割愛している。

1号住居 (Fig. 38)

調査区の中央部よりやや北東に位置する。3号墳とは北東約22mの間隔を持つ。不正方形の平面プランをなす住居跡である。削平のため本来の形状は知り得ないが残存状況から一辺約3.5mを測ったと推測される。床面に多数の柱穴跡を検出している。かまど、炉跡等は確認できなかった。埋土及び床面から土器が出土した。

出土遺物 (Fig. 38、P.L. 11)

3が土師器で残りはすべて須恵器である。1は甕で復元器高11cm、口径7.6cm、復元胴径12cmを測る。底部にヘラ記号がある。口縁部内面から外面体部中央までヨコナデである。自然釉がかかる。2は甕の口頸部で2本の沈線を巡らす。内面はヨコナデが施されている。3は高杯の脚部である。器面風化のため調整は不明である。4は広口壺の口縁部で復元口径は25.6cmを測る。内外面ともにヨコナデが施されている。5は高杯形器台の杯の部分で脚部を欠損する。復元口径38.8cmを測る。外面に2本ずつ沈線が巡り、その間に櫛歯文を配する。基部から体部下位にかけてタタキ目が施されている。調整は内外面ともにヨコナデである。自然釉がかかっている。

標高58.20m

(3)土坑

Ⅱ区で検出した土坑は計6基である。いずれも平面が楕円形もしくは隅丸長方形プランを呈している。削平を著しく受けているため遺構残存状況はあまり良くない。

1号土坑

(Fig. 39)

調査区のほぼ中央部に位置する。1号住居跡とは東約5mの間隔を持つ。主軸方向をほぼ東西にとる。長さ1.5m、幅1.1mの隅丸長方形を呈し、現存深さ約30cmを測る。底面は長さ1m、幅70cmを測る楕円形を呈し、ほぼ水平である。断面は逆台形をなす。土坑内から土器片が出土した。

出土遺物

(Fig. 41)

出土した遺物はすべて弥生土器である。1は壺の底部で、内外面ともにナデが施されている。2～7は甕である。2は如意形を呈する口縁部で、調整は外面がハケ、内面がナデである。3～7は口縁が外側に張り出す。3は断面がカマボコ形に

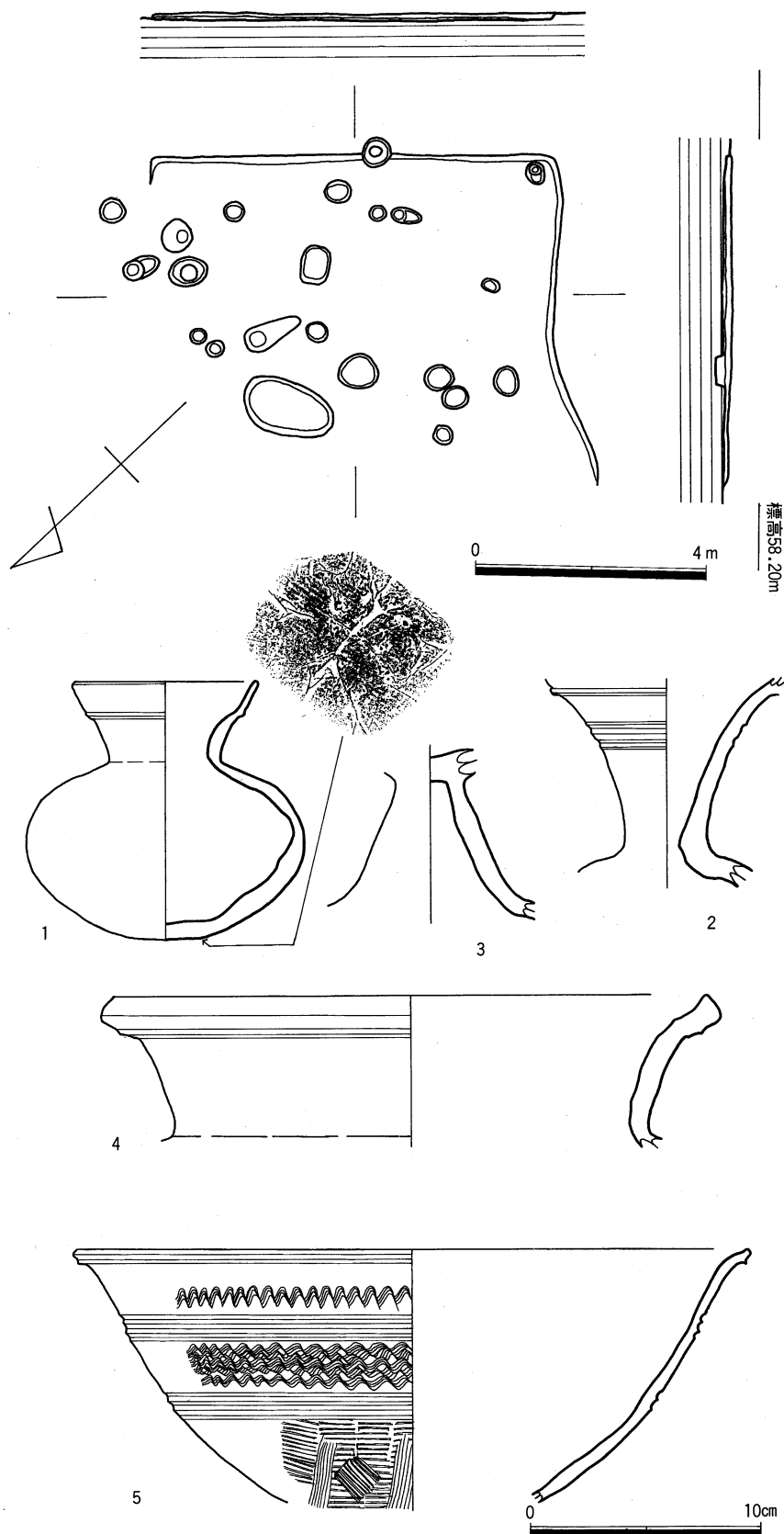


Fig. 38 住居跡・出土遺物実測図(1/60・1/3)

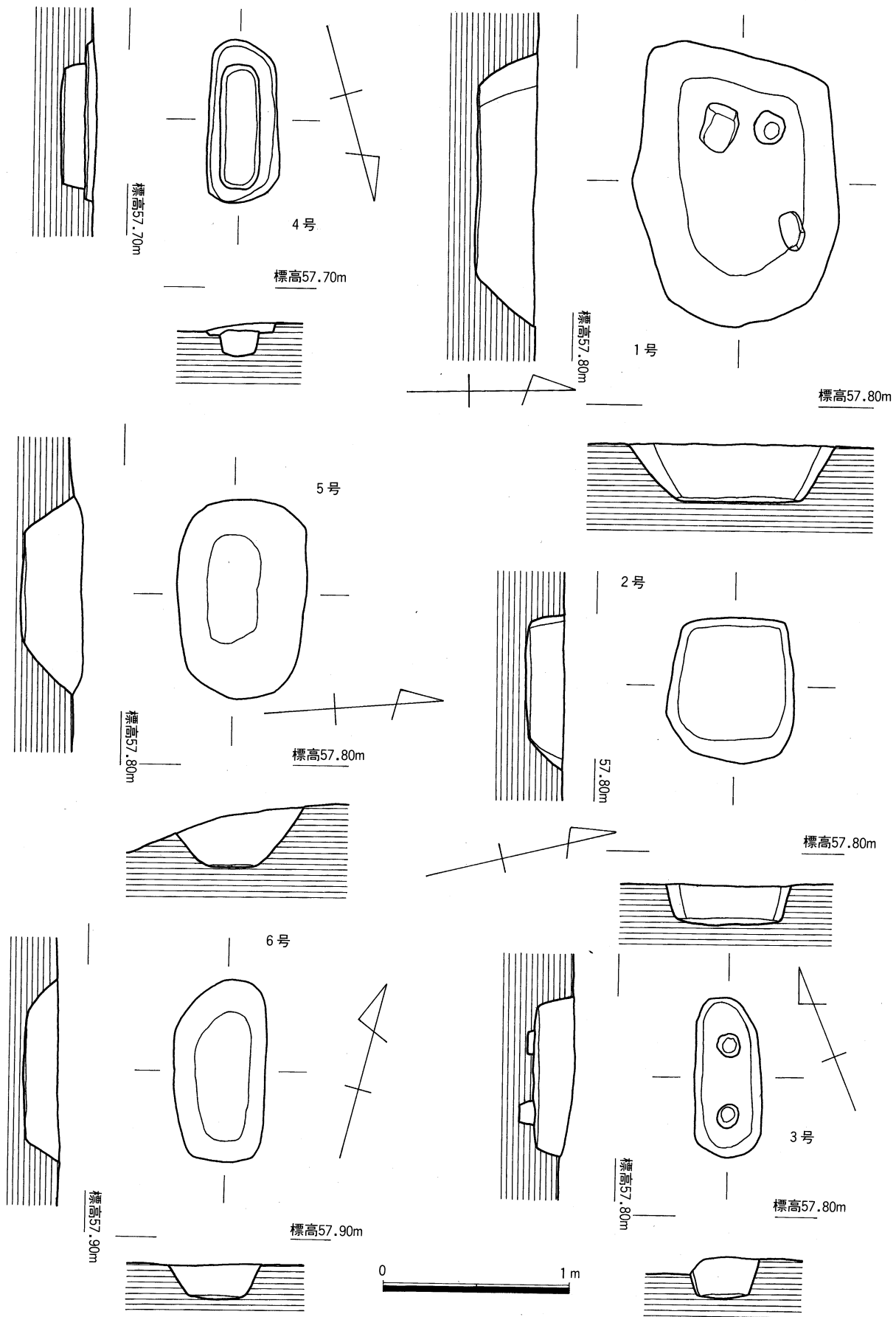


Fig.39 1~6号土坑実測図(1/30)

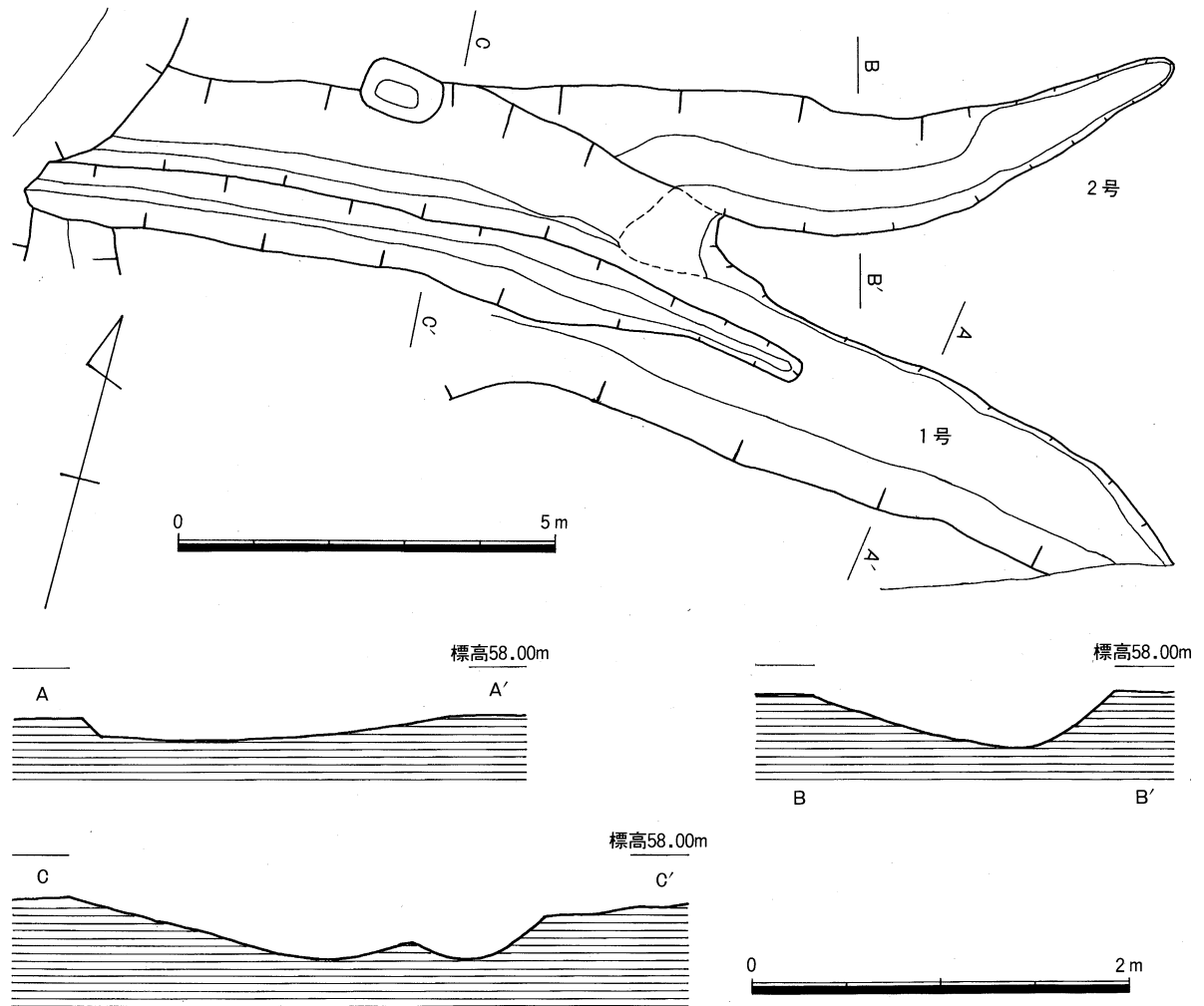


Fig.40 1～2号溝・断面実測図(1/100・1/40)

近い。調整は内外面ともにナデである。4は断面が三角形で、器面風化のため調整は不明である。5～7は小型の甕である。5、6は器面風化のため調整は不明、7は内外面ナデである。

2号土坑 (Fig. 39)

3号墳周溝に隣接し、1号土坑とは北西約6mの間隔を持つ。主軸方向をほぼ東西にとる。長さ80cm、幅70cmの隅丸長方形を呈し、残存深さ20cmを測る。底面は長さ60cm、幅60cmを測る隅丸正方形を呈し、中央部付近がやや深くなっている。断面形は舟底状をなす。土坑内埋土から土器片が出土した。

3号土坑 (Fig. 39)

3号墳周溝をきっており、2号土坑とは約4.5mの間隔を持つ。主軸方向はN-22°-Eにとる。長さ90cm、幅36cmの隅丸長方形を呈し、残存深さ20cmを測る。底面は長さ75cm、幅20cmを測る隅丸長方形を呈し、ほぼ水平である。断面形は逆台形を呈す。土坑内から遺物は出土しなかった。

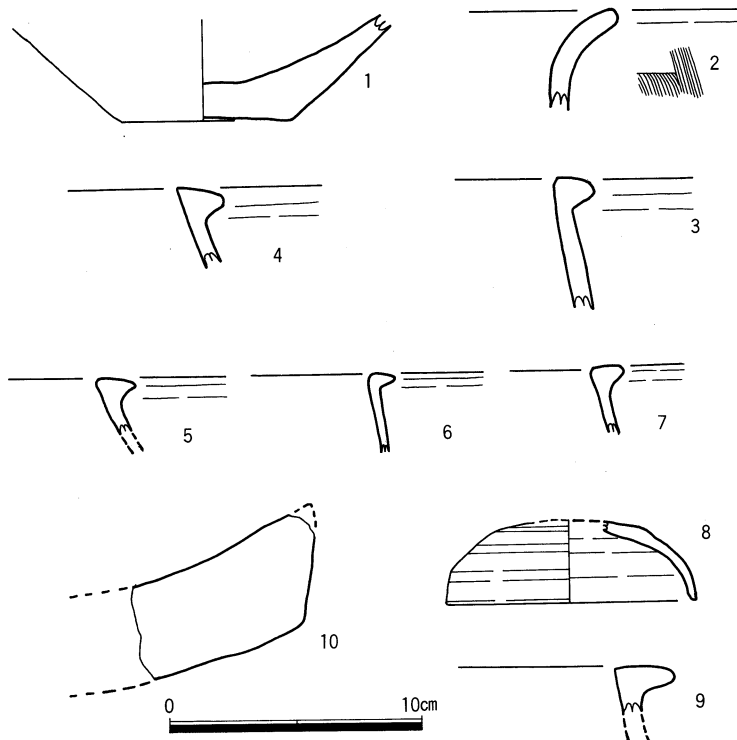
4号土坑 (Fig. 39)

3号墳周溝をきり、3号土坑とは北約0.5mの間隔を持つ。主軸方向をN-16°-Eにとる。長さ90cm、幅40cmの隅丸長方形を呈し、残存深さ20cmを測る。底面は長さ65cm、幅20cmを測る隅丸長方形を呈し、ほぼ水平である。断面形は2段からなる逆台形を呈す。土坑内から遺物は出土しな

かった。

5号土坑 (Fig. 39)

調査区の中央部よりやや南西側に位置する。4号土坑とは東南約2mの間隔を持つ。主軸方向を東西にとる。長さ90cm、幅70cmの隅丸長方形を呈し、残存深さ約30cmを測る。底面は長さ70cm、幅30cmを測る隅丸長方形を呈し、ほぼ水平である。断面形は逆台形を呈する。土坑内から遺物は出土しなかった。



6号土坑 (Fig. 39)

調査区の北東端部に位置し、1号住居とは南西約2mの間隔を持つ。主軸方向をほぼ南北にとる。長さ1m、幅50cmを測る

楕円形を呈し、残存深さ20cmを測る。底面は長さ70cm、幅30cmを測る隅丸長方形を呈し、ほぼ水平である。断面形は逆台形を呈する。土坑内から遺物は出土しなかった。

Fig. 41 出土遺物実測図 (1/3)

(4)溝

Ⅱ区で検出した溝は計2条である。いずれも削平を著しく受けているため遺構残存状況はあまり良くない。

1号溝 (Fig. 40)

調査区の南端部に位置し、3号墳周溝に切られている。残存幅2m、深さ35cmを測る。後世の削平を著しく受けているため、遺構上部の旧状は知り得ない。断面はゆるやかな舟底状をなす。遺構は東から南西に向かって流れている。溝内から遺物は出土しなかった。

2号溝 (Fig. 40)

1号溝に切られている。現存幅1.7m、深さ30cmを測る。後世の削平を著しく受けているため、遺構上部の旧状は知り得ない。断面はゆるやかな逆三角形を呈す。遺構は北東から南西に向かって流れている。溝内から遺物は出土しなかった。

(5)その他の遺物 (Fig. 41)

8は須恵器で小型の蓋である。復元口径9.8cmを測る。外面天井部はケズリ、その他はヨコナデである。住居跡付近で出土した。9は弥生土器の甕の口縁部で、断面L字状を呈する。器面風化のため調整は不明である。10は平瓦の破片である。厚さ4cmを測る。器面は風化が激しいが、上面には布目、下面には縄目がみられる。

4. 小結

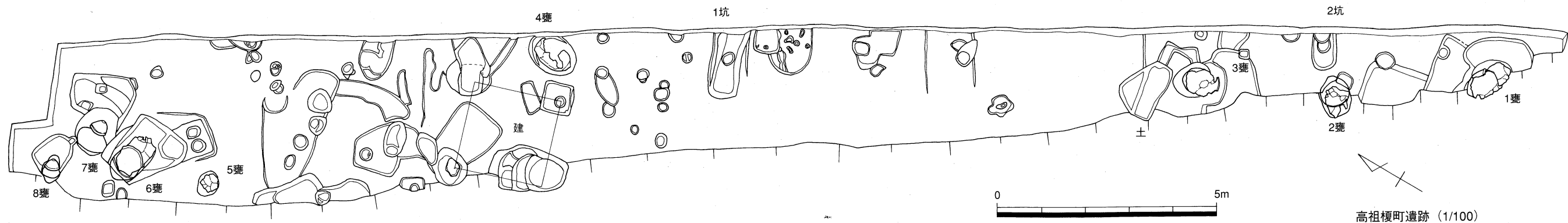
高祖大鷲遺跡からは弥生時代から歴史時代わたる遺構、遺物が出土したが、残存状況はきわめて悪かった。とくに古墳の破壊は著しく、3基とも石室の石材さえほとんど残されていない状況であった。このような遺跡の状況であったが、気付いた点について簡単にまとめてみたい。

まず、弥生時代中期初頭～前半の遺物が目立つことである。同時期の遺構としては、1区の1号木棺墓、1号土坑、2区の1号土坑があげられる。1区の2号木棺墓も1号木棺墓と規模、形態がよく似ていることから同時期の遺構と考えられる。遺構の数は少ないが、これは削平により消滅したためと考えられる。消滅した遺構の中には住居跡なども含まれていたことが想定され、同期の集落の存在が考えられる。ただし、地形から考えると集落の規模としては、小規模なものであったと考えられる。

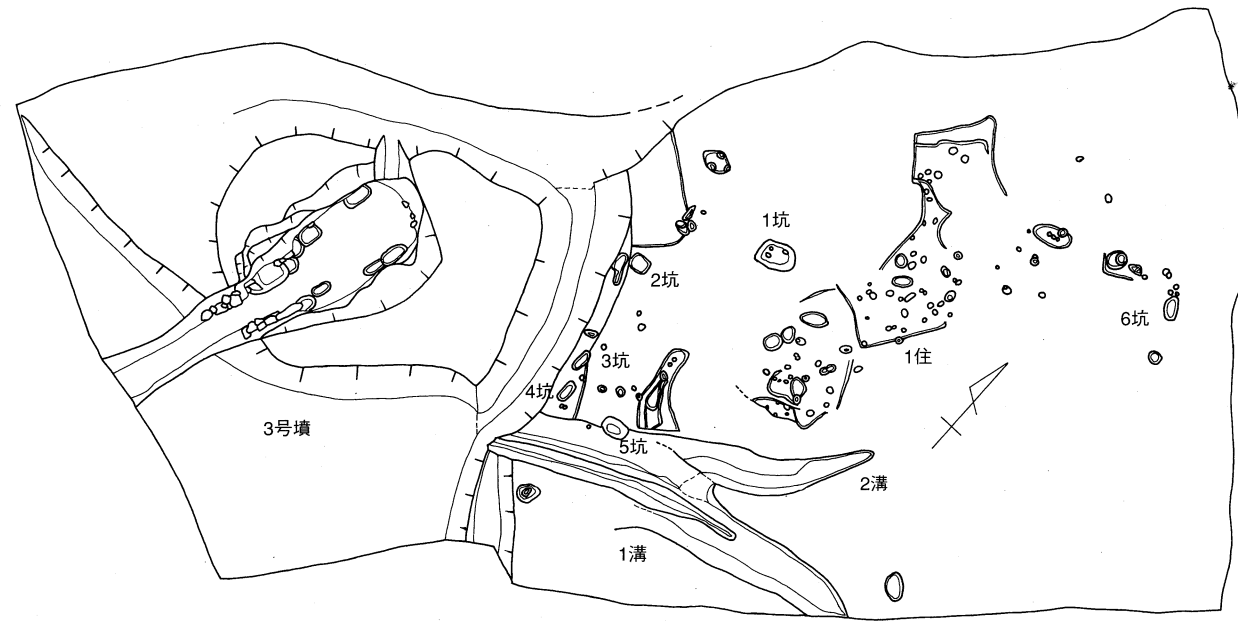
次に、2区から出土した古手の須恵器があげられる。器種としては甗、器台がある。3号墳東側から出土した大型甗はI形式3段階（中村編年）に相当するもので、その他の器台、甗もほぼ同時期と考えられる。いずれも自然釉がかかり、器台は意識して釉薬を施したものではないかと思われるような状態である。調査区で検出した古墳は、いずれも横穴式石室をもつ6世紀代のもので、これらの須恵器の時期とは合わない。あるいはこれらの須恵器を出土する時期の古墳が存在した可能性も考えられる。

V. おわりに

平成元年度から開始された川原川右岸地区県営ほ場整備事業も、今年度をもって面的な工事が終了した。ほ場整備事業の予定地は三雲・井原遺跡群と国指定史跡「怡土城跡」に狭まれた、重要な地域である。このことから前原市教育委員会では、広範囲な遺跡の存在を想定し文化財調査にあたった。発掘調査も工事の施工に伴い、農林サイドと協議を重ねながら進めてきた。この間試掘調査によって予想どおり広範囲に遺跡が存在することが判明した。しかし、その大部分は農林サイドのご理解により、設計変更などで現地に保存していただいた。また、発掘調査によって得られた成果により今まで不明であった、三雲・井原遺跡群の東側の状況が次第に明らかになってきた。今回報告した高祖榎町遺跡、高祖大鷲遺跡ともに残存状況はきわめて悪かったが、弥生時代前期末～中期初頭の甕棺墓地の発見や5世紀代の須恵器の出土は注目すべきものである。今後はこの成果を基礎資料として文化財保護にいっそう努力してゆきたい。

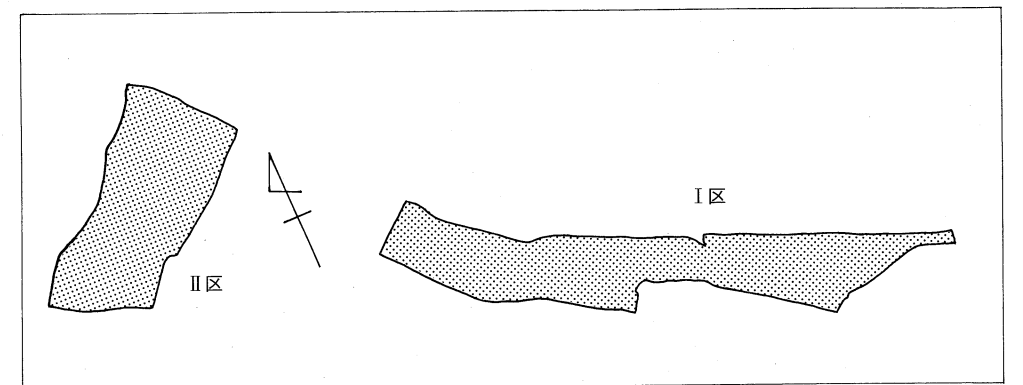


高祖榎町遺跡 (1/100)



高祖大鷲遺跡II区 (1/300)

高祖大鷲遺跡調査区配置図 (1/1,500)



- 甕 甕棺墓
- 木 木棺墓
- 土 土墳墓
- 住 住居跡
- 建 掘立柱建物
- 坑 土坑
- 落 落ち込み状遺構



高祖大鷲遺跡I区 (1/300)

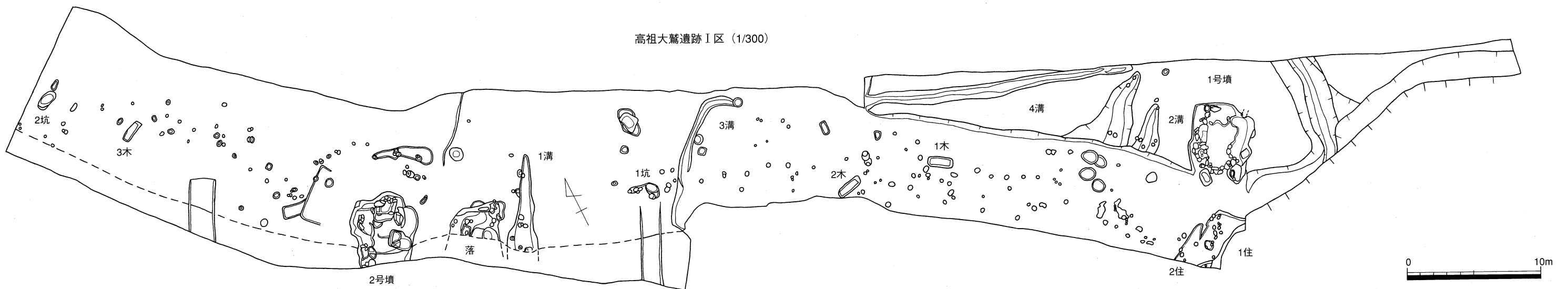


Fig. I 調査区全体図 (1/100, 1/300)

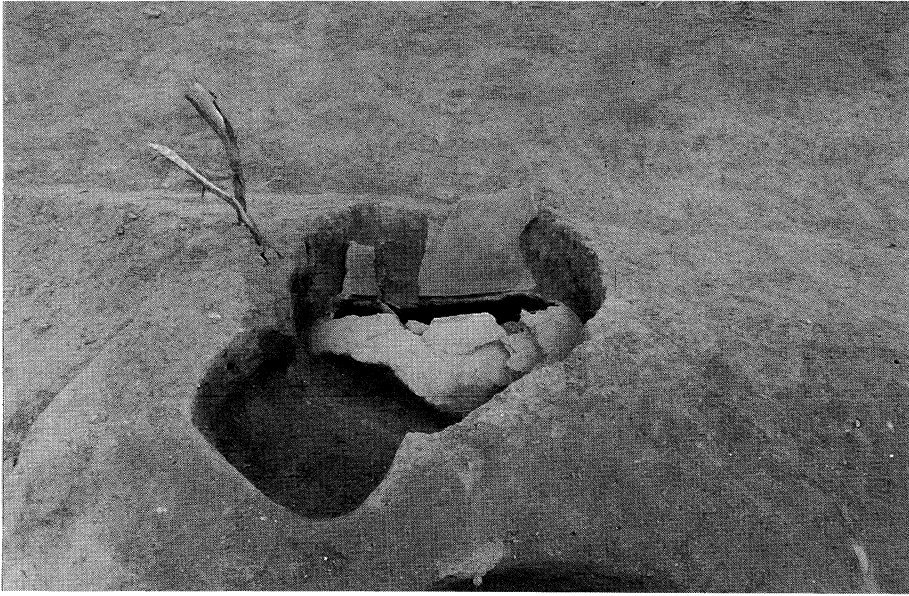
PLATES



a. 高祖榎町遺跡全景



b. 5～8号甕棺（南から）



a. 2号甕棺 (東から)

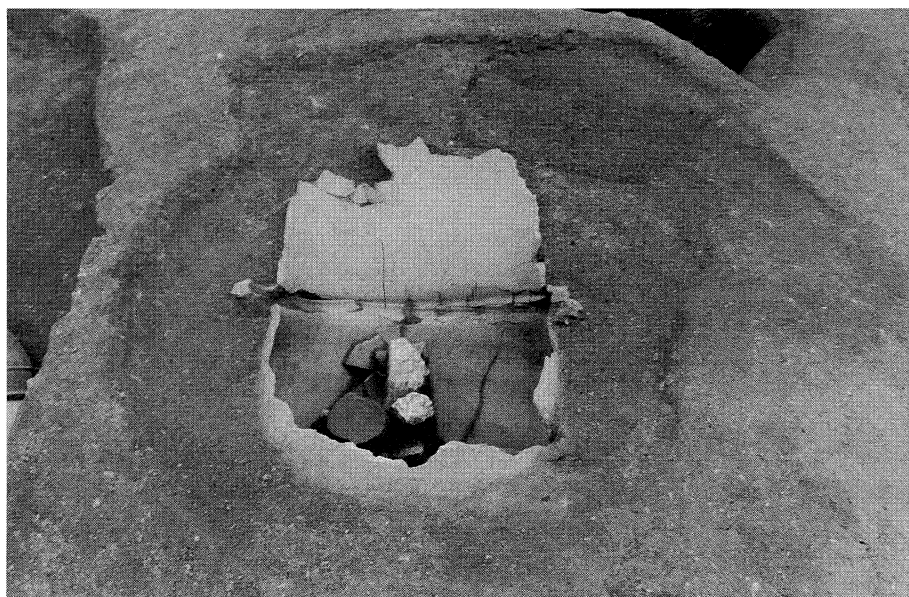


b. 3号甕棺 (東から)

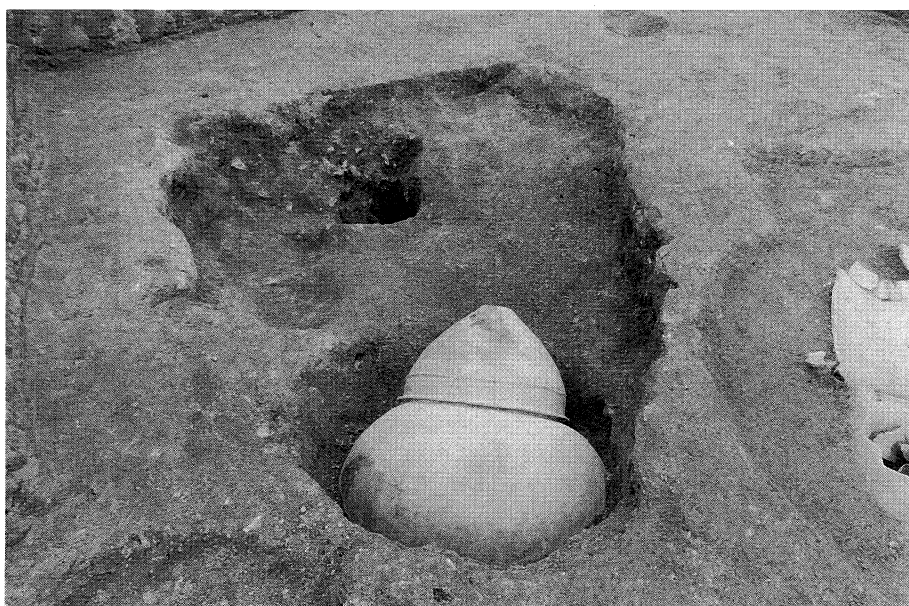


c. 4号甕棺 (東から)

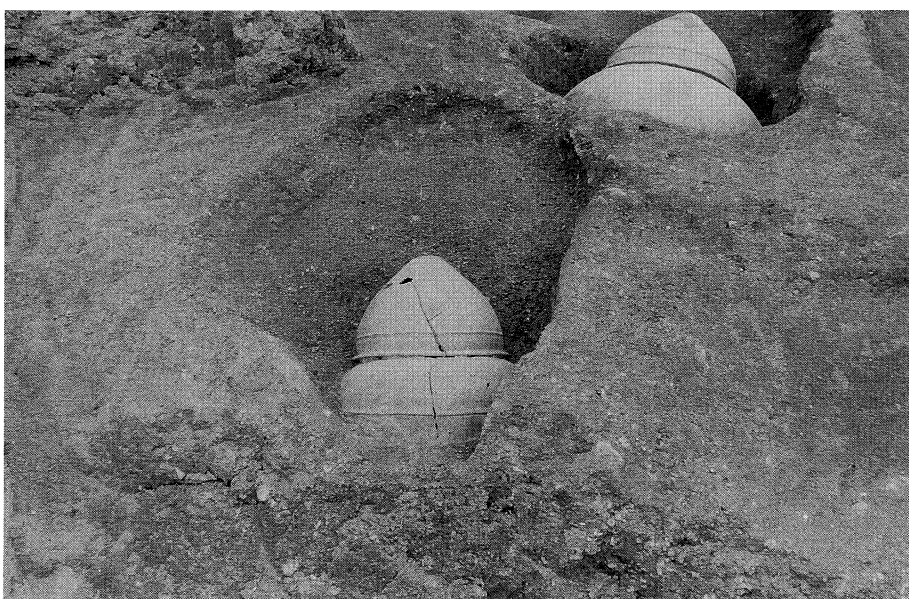
a. 6号甕棺（西から）



b. 7号甕棺（西から）



c. 8号甕棺（西から）





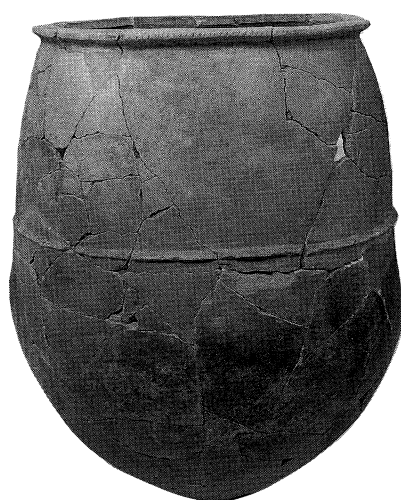
1号上甕



1号下甕



2号下甕



2号上甕



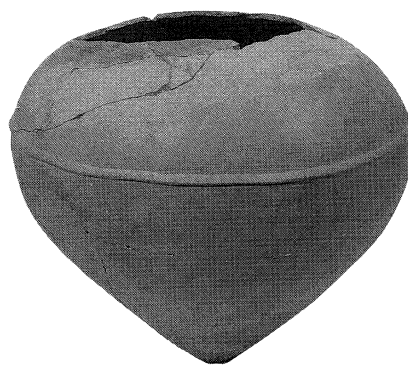
6号下甕



6号上甕



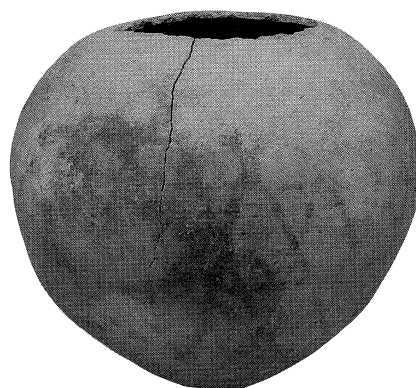
8号上甕



8号下甕



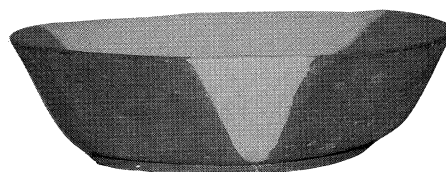
7号上甕



7号下甕



6号甕棺内出土遺物



甕棺及び出土遺物



a. 高祖大鷲遺跡Ⅰ区全景(上から)



b. 高祖大鷲遺跡Ⅱ区全景(上から)



a. 1号墳石室（I区、南から）



b. 2号墳石室（I区、西から）



a. 1号木棺墓 (I区、北から)



b. 2号木棺墓 (I区、東から)



c. 1号土坑 (I区、西から)



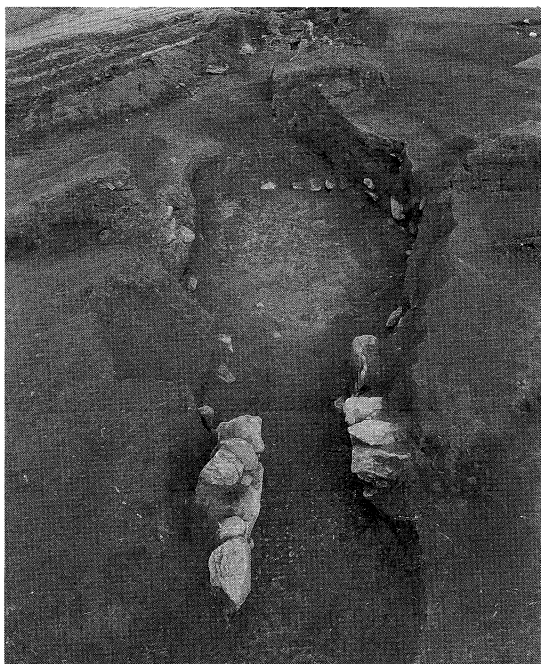
d. 1号・2号住居跡 (I区、南から)



a. 3号墳全景（Ⅱ区、上から）



b. 3号墳近景（Ⅱ区、東から）



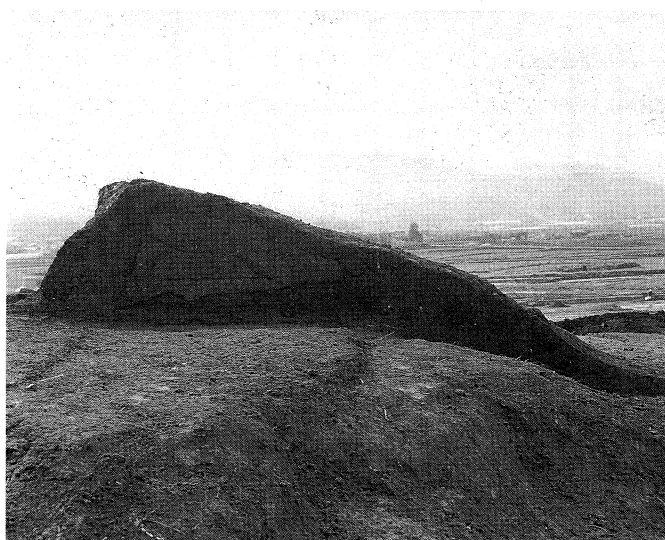
a. 3号墳石室 (南から)



b. 3号墳石室 (北から)



c. 3号墳墳丘断面A-A' (北から)



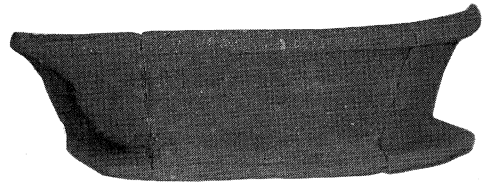
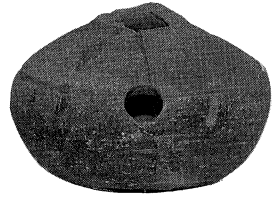
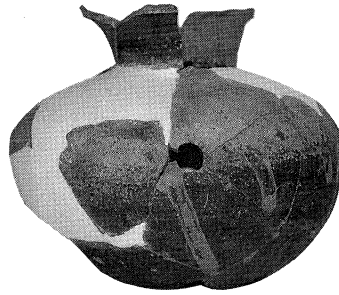
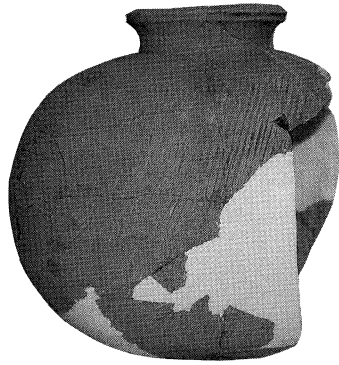
d. 3号墳墳丘断面C-C' (北から)



e. 3号墳墳丘断面B-B' (西から)

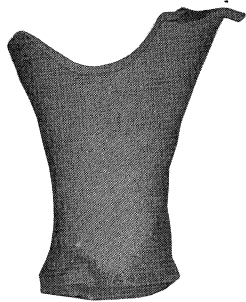


f. 住居跡ほか (Ⅱ区、東から)

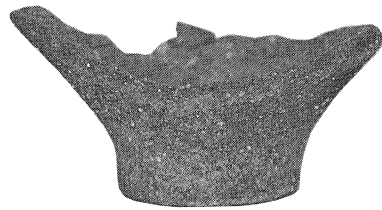


II 区住居跡

3 号墳出土遺物



1 号墳



I 区 1 号土坑

川原川右岸地区遺跡群 I

前原市文化財調査報告書

第 57 集

平成 7 年 3 月 31 日

発行 前原市教育委員会
福岡県前原市大字前原623番地

印刷 株式会社ぎょうせい

